



Ritsumeikan University
College of Letters

教 学 の 手 引 き

2005

東 洋 史 学 専 攻

文 学 部

Table of Contents

東洋史学専攻

■ 東洋史学専攻 教学紹介

1	教学理念と設置科目	3
2	研究入門の位置づけと研究発表	6
3	レジュメの作り方とレジュメ見本	8
4	レポート・論文の書き方	10
5	参考書	16
6	雑誌（月刊誌など）.....	18
7	東洋史研究のための基本工具類	18
8	卒業論文の栞	33

■ 履修方法とユニットプログラム、履修モデル

1	科目一覧	40
2	履修方法	40
3	受講登録上の注意	41
4	ユニットプログラム	42
5	履修モデル	44

■ 学修を進めるにあたって

1	文献資料室と共同研究室	47
2	クラスロッカーの使用方法について	47
3	セミナーハウスの正課用利用の手引き	48
4	学生印刷室の利用について	49
5	自主ゼミ援助制度について	50
6	「小集団教育推進補助費」の取り扱いについて	50
7	清心館「学生談話室」の利用について	51
8	立命館大学人文学会	51
9	文学部事務室について	52



東洋史学専攻 教学紹介

1 教学理念と設置科目

(1) 教学理念・目標

漢民族は世界最古の文明の一つを築き、その文明的自負によって「中国」と自称しました。その周辺の朝鮮・日本・ベトナムなどは漢字に代表される中国文化を受容し、中国とともに東アジア世界を構築しました。モンゴル・中国東北部の北アジア世界やトルキスタン・チベットなど内陸アジア世界は、中国との関係がその歴史に決定的な影響を及ぼしました。中国を中心とするこれら諸世界の歴史は、主に漢文で記述されてきました。東洋史学とは、漢文史料に基づく歴史研究の営みをいいます。

わが国は古来中国との関係が深く、中国学の伝統がありましたが、この中国学の土壌に近代歴史学の種子が蒔かれ、開花したのがわが国の東洋史学です。中国学の伝統と緻密な方法によって、わが国の東洋史学は世界的水準を堅持し、東洋史学専攻も、漢文原典の徹底的な精読を踏まえた実証主義的学風を教学の基本に据えてきました。諸君はこれら先人の業績を発展的に継承し、新たな伝統を加えて次世代につないでいかなければなりません。そのためには不断の努力が必要です。

西洋的価値観の普遍性がもはや通用しなくなった現代世界にあって、東洋史学は、西洋とは異質の世界をその起源に遡って研究するというすぐれて今日的な意味をもっています。また東洋史学のより深い習得のためには、人文科学諸領域に関する広い教養に基づき、東洋の独自性を世界的視野において相対的に理解する必要があります。そのために基礎科目の履修や幅広い読書によって教養を広め、日本史・西洋史・インスティテュートなどの専門科目をあわせ学習することで、学際的な視野を身につけることを心がけてください。

東洋史学専攻では、中国語を第一外国語に指定し、その修得を重視しています。中国語は研究史の把握や古典漢文のより精確な解読のために必要なツールです。言語の修得はその背景となる文化の理解であるともいえます。中国社会のより深い理解のため、また高まる中国語への社会的需要に応じるためにも、将来にむけて会話を含めた運用能力の向上につとめましょう。副専攻やテーマリサーチ型ゼミナールの履修、毎年南開大学で行われる語学研修に参加することで、語学力のブラッシュアップすることができます。検定試験のスコア向上もよい目標になります。検定の種類によって一概に言えませんが、「中国語検定試験（中検）」ならば、準2級程度が目標となるでしょう。

ここに掲げた履修モデルは、あくまでも参考事例です。研究テーマ・履修科目は、各自の自由な発想を基本に、卒業論文の成果に結びつくように計画してください。

(2) 1・2回生小集団教育科目

「歴史学」とは何だろう。受験用「世界史」のようなことがらの暗記、歴史小説のようなエピソードのつらなりでないことは確かです。研究対象としての「歴史学」「東洋史学」の何たるかを学ぶのが「研究入門」です。「研究入門」では、歴史学・東洋史学研究の方法を学び、東洋史学の研究対象を地理的時代的にどのように把握すべきかを問い、基礎的な知識を習得し、東洋史研究のための主要史籍の解題を行うなど、東洋史学研究への導入を目標とします。後期の史籍解題では、一人一人レジュメを作成して発表します。わからないところは、TAや助手と十分相談して充実した発表内容に仕上げてください。

「史学概論」は歴史学の方法論、史料批判などの基礎を学ぶ科目です。「東洋史概説（近代）」とともに、ぜひ1回生時に履修してください。

2回生時の「基礎講読」は、1回生時の「漢文史籍読解」で得た漢文史料の読解力を応用した史料研究と、「研究入門」で得た方法の実地訓練としての研究発表とを行います。前セメの史料研究は、共通のテキストを素材に史料の読解、出典の探索を行って史料への理解力を養います。後セメの研究発表は、課題の設定、文献の検索・理解・概括を行い、課題に対するアプローチの能力を養います。テキストの読解については、必ず前もって、TAの助言を受けてください。また人文科学総合講座をはじめ、教養科目の履修によって基礎学力の充実と学問的視野の拡大にも心がけてください。

(3) 概説科目

「東洋史概説」は、古代・中世、近世、近代の三つの時代に分けて講義が行われています。一般教養的歴史概説ではなく、専門科目としての概説ですから、視野を広げるとともに、歴史に対する問題意識を養うことを目的

とします。従って必ずしも通史ではなく、テーマを特定した講義の場合もあります。ここで養われた問題意識は、「基礎講読」の文献研究、「講読演習」「演習」などに活かされるはずです。なお、教職課程の履修者は「(教)外国史」(東洋史担当分)もこれに類するものであり、あわせて受講するとよいでしょう。

(4) 特殊講義科目、他専攻の専門科目

「東洋史特殊講義」は、東洋史上の重要な課題について、担当者がその研究成果を開陳するものであり、これを履修することによって、最新の知見や研究上の問題点、具体的な研究方法の実例に接することができ、専門の研究論文を読む上で、参考に資する点が多くあります。時代や分野につき、なるべく「概説」で言及できない部門を選ぶようにしており、開講科目のうち少なくとも一つは、中国史以外の問題を取りあげるようにつとめています。「特殊講義」は毎年異なったテーマ・内容ですから、積極的に受講して広範な見識を身につけてください。特殊講義の中に毎年「東洋学のための情報処理」を内容とする科目を開講しています。この科目は情報処理入門で得た基礎知識をもとに、東洋学研究に特化した情報と各種スキルの習得を目標としています。従来、東洋史の史料といえば、殆ど紙媒体だけでしたが、近年はP.C.のハード、ソフトの進歩が著しく、中国や台湾のWeb site上に基本的な漢文史料がテキストスタイルで公開されていますし、一部の漢籍はCD-ROMで販売されています。少し勉強すれば、それらを利用できます。巻末に代表的なWeb siteのaddressをあげておきます。レポートや卒論の作成に役立てて下さい。

そのほか日本史・西洋史・哲学・中国文学など他専攻にも東洋史との関係のあるテーマの講義が開講されることがあります。また、インスティテュートの「歴史人類」では、東洋史と関係の深い科目が開設されています。あわせて受講すれば新しい知見や方法論上の示唆を得ることができるでしょう。

(5) 漢文史籍読解・講読演習

歴史研究においては、まず史料を正確に読みとることが必要です。本学の東洋史学専攻は漢文史料文化圏を中心とする学統をもちます。ゆえにその史料である漢文・現代中国文を正確に読むことが必要であり、「漢文史籍読解」「講読演習I」は、その読解力を養うことを目的とします。漢文・中国文は、われわれがなれ親しんだ漢字で綴られていますが、本来あくまで外国語ですから、地味で真剣な努力が必要であり、予習・復習を怠ることはできません。字面からの類推だけでは正確な理解には及びません。英語や独語などの外国語学習で辞書を引くことが当たりまえであるように、中国語の学習でも辞書を引くことが大事です。

また、講読演習の1つは、より高い水準の史料読解力を目指す人、大学院進学を希望する人たちのために開講されます。どの講読演習がそれに当たるかは、履修ガイダンスなどの機会に説明がありますから、意欲のある諸君は是非受講してください。

(6) 3・4回生小集団教育科目

3回生「講読演習」と4回生「東洋史演習」は合同ゼミの形で開講されます。古代史、中世史、近世史、近現代史、アジア諸民族史の5～6クラスが開講されます。進級時に変更も可能ですが、4回生は3回生時と同じゼミに属することを原則としますので、ゼミ選択はよく考えて行ってください。

4回生はこの「演習」で、専攻学習の総仕上げである卒業論文を作成します。卒業論文は東洋史上の具体的な問題を選択し、各自が自主的に研究を進め、その成果を論文としてまとめるものです。この研究を通じて、単に東洋史だけでなく、広く一般の諸問題に対する思考力が養われますから、論文の作成には大いに努力してください。

3回生は「講読演習」において、4回生の具体的な卒業論文作成の過程を見ながら、卒業論文の何たるかを理解し、卒論のテーマ設定、絞込みを進めると同時に、テーマの周辺の学問的な知見を広げることが大切です。いわば卒論の下準備期間、卒論への助走期間といえます。その際、テーマリサーチ型ゼミナール、他専攻、インスティテュートなどの演習科目を併せて履修することで、自己の研究を一層深めることもできます。

(7) テーマリサーチ型ゼミナール

テーマリサーチ型ゼミナールは、2003年度からスタートした、文学部が擁する従来の枠組みでは捉えきれない人文学のあらたな分野やテーマ、アプローチを、ゼミ形式で大胆に実践していく、まったく新しい形態のゼミナールです。21世紀の「知」のグローバルゼーションを目指して、人文学に共通する普遍的なテーマ、特定地域

を多面的にリサーチしうるテーマ、現在進行形のタイムリーなテーマ、新世紀の社会に直結する実践、実習的テーマなど、現代社会が人文学に求める革新的テーマを設定します。また、テーマリサーチ型ゼミナールでは革新的・斬新なテーマを追求するためにも、常にゼミテーマを見つめ直しています。

3回生のゼミ選択の際には、卒業時（4回生）にどのようなテーマで研究をし、卒業論文執筆をしたいかといった事を考え、ゼミを選択します。その際、自専攻のゼミ、テーマリサーチ型ゼミナールといった選択肢の中で自分に適するゼミを選んでください。

テーマリサーチ型ゼミナールでどのようなテーマのゼミが開講されているのかはシラバスで確認をして頂きたいと思いますが、以下に2005年度、3回生ゼミのいくつかを記しますので是非参考にしてください。

2005年度3回生ゼミテーマ 例)

他者問題と文化理解、文化としての「移動」2、京都から発信する京都文化学、辞書をつくる、ECOTOURISMエコロジーの旅2、

(8) 卒業論文

【テーマの設定】卒業論文のテーマは、論文の成功、不成功に関わる重大な問題ですから十分に考えなければなりません。テーマは、東洋史に関するものであれば、特に制限を設けていませんが、実際には様々な制約があります。大多数の諸君にとって、卒業論文は最初の研究論文作成であり、しかも限られた期間に、限られた枚数にまとめあげなければならないものですから、あまり大きな対象やテーマを選ぶことは不適當です。また、歴史学はあくまでも実証に基礎をおかなければなりませんから、その基礎である史料の存否、多寡、その解読、および入手の可能不可能などによって、選べる範囲も自ずと限られてきます。

テーマというものは、大雑把な構想のもとに文献を読み、史料を集め、一応の骨組みを作ってからようやく最終的に決まるものであり、そのテーマで論文を作成することが可能かどうかは、最近の論文のテーマ（毎年『立命館文学』誌上に掲載）を参考にしてください。学界専門誌の動向にも留意し、現在どのような点が東洋史学界で議論されているのか、あるいは未開拓の分野であるのかを知ることが必要です。未開拓の分野を研究することは意義のあることですが、初めて論文作成を経験する諸君にとっては、史料の有無、読解力、批判力などの点からテーマ負けしてしまうおそれもあります。教員の助言を受けてください。

【卒論題目の登録】卒論の題目は登録すると、勝手に変更できません。登録した題目と異なる題目の卒論は受理されません。どうしても変更したい場合は前もって、所定の期間中に変更届けをだしておかなければなりません。また題目は論文の内容を的確に表現するものでなければなりません。登録する前に一度担当教員に相談することを勧めます。

【卒論作成のルール】論文の体裁については、各自が学術雑誌の論文をよく読んで、その要領を会得してください。本専攻に特別のルールもありますから、「8 卒業論文の栞」をよく読んでください。

2 研究入門の位置づけと研究発表

(1) 研究入門

文学部では、卒業論文の作成を4年間の学習・研究成果の総合的結晶と位置づけています。少し大げさに言えば、すべての科目が卒業論文作成のために置かれているということになります。なかでも1回生から4回生までの各回生に配当された研究入門・基礎演習・講読演習・卒業論文演習の演習科目は、直接に卒業論文の作成につながる科目です。演習科目はそれまでに基礎科目や専門科目の履修によって得られた知識や読解力を駆使し、自分の関心あるテーマにしたがって総合する力を養おうとするものです。このように学生の自主的な学習を重視する演習科目を専攻教学の中心と位置づけ、各回生で必ず履修しなければならない登録必修や必修科目に指定しています。

研究入門では、前期は 東洋史学の対象となる空間、東洋史学研究の歴史、研究文献の検索法、四庫分類の理解と漢籍分類目録の使用法、辞書・歴史辞典・歴史地図・年表などの各種工具の利用法などを学び、研究のための基礎的知識とスキルの修得をめざします。またライティングでは、収集したいろいろな情報を順序だてて整理し、まとめて、それを正確に相手に伝えることができるよう基礎的な文章作成技術を学びます。

(2) 研究発表(史籍解題)

研究入門の後期には、ひとりひとりが、(3)の「史籍解題使用書目一覧」から担当する史料を1つ選んでレポートを作成し、その内容を教室で発表します。この史籍解題というのは、東洋史学を研究するのに必要な史料について知っておかなければならない事項(著作者・成立年代・著作の由来・史料価値・使用例など)について、いろいろな観点から解説を加えることです。

高校までの歴史の勉強を思い出してみましょう。極端に言えば、中高の歴史の勉強は教科書と年表があればできました。高校までの歴史が主に「教科書に書かれた事実」を記憶することであったのに対し、大学での歴史の研究は、史料にもとづいて事実を明らかにするという点にあります。「教科書に書いてある事実」そのものも疑ってかかるわけです。そしてその時、より所となるのが史料です。したがって、大学における歴史と高校における歴史の違いは、史料にかかっていると言えるのです。研究入門において史料解題を課すのは、入学まもない諸君が、なるべく早い時期に高校の歴史教育と訣別し、歴史研究と史料との関係を理解し、東洋史研究の代表的な史料について基礎的な知識を身に付けてもらいたいからです。

さらに1回生の早い時期から図書館の利用に慣れることも研究入門の目的のひとつです。レポートの作成にあたっては、実際に自分で文献資料室の書庫に入り、たくさん文献の中から必要なものを探し出さなければなりません。諸君は、図書館や文献資料室の書庫で、これまで見たこともないたくさんの書籍(史料)との出会うでしょう。まず史料を直接自分の手にとってひも解いてみましょう。現在の諸君には、おそらくそこに何が書いてあるのかさえ理解できないかもしれません。しかし史料を手にとっている時、あなたは他人の目を借りずに自分自身の目で、数百年前の歴史世界と直接対峙している自分を実感できるでしょう。歴史研究の入り口に第一歩をふみ出した瞬間です。

また、人前で自分の考えを正確にのべ、理解してもらおうということは、実際やってみると思いのほか難しいものです。特に限られた時間のなかで発表するのはむずかしい。これから皆さんは4年間、卒論演習まで何度も人前で発表することになるでしょう。おそらく卒業後もいろいろな職場で企画書を作成して上司や同僚のまえで発表しなければならないはずです。そうした時、どんなに立派な内容でもボソボソ小さな声で話すよりも、大きく明瞭な声でまっすぐ前を向いて話した方が説得力があるに決まっています。ゼミ発表も実社会でのプレゼンも基本は同じで、必要な基本的トレーニングの1つです。

レポート、レジュメ(発表要旨を記した配布資料)の作成にあたって、T.A.や助手の指導助言をうけることになっています。しかし何から何まで教えてもらうのでは演習になりません。自主的な学習が基本であることは言うまでもありません。

おおよそ以下の日程で進められます。

7月上旬:担当書目の決定

7月中旬:関係資料の収集(T.A.や助手の指導助言、図書館・文献資料室の利用、コピー)

夏季休暇：レポートの作成

9月上旬：レポートの作成（図書館・文献資料室の利用）

9月下旬：レポート提出

10月：後期セメスター：研究発表、発表者は順次レジユメの作成にとりかかる（T.A.や助手の指導助言を受ける）研究発表（1時間2～3人。発表前日、T.A.や助手とともに特別借り出し手続きを済ます。当日史料の借り出し。**発表終了後、史料返却**）史料は、諸君の後輩たちもこれから長く利用するものであり、中には現在購入できないものもあります。**大事に丁寧に扱ってください。**

（３）史籍解題使用書目一覧

1 春秋三傳	2 詩經	3 論語	4 孟子	5 韓非子
6 墨子	7 方言	8 爾雅	9 広韻	10 説文解字
11 竹書紀年	12 呂氏春秋	13 史記	14 漢書	15 後漢書
16 三国志	17 晉書	18 宋書・南齊書	19 梁書・陳書	20 魏書
21 北齊書・周書	22 南史・北史	23 隋書	24 舊唐書	25 新唐書
26 新舊五代史	27 宋史	28 元史	29 遼史	30 金史
31 明史	32 清史稿	33 資治通鑑・資治通鑑紀事本末		
34 建炎以來繫年要錄	35 大唐六典	36 通典	37 冊府元龜	38 宋會要輯稿
39 文獻通考	40 明會典	41 大清會典	42 清國行政法	43 大明實錄
44 大清實錄	45 雍正硃批諭旨	46 籌辦夷務始末	47 世説新語	48 顏氏家訓
49 荊楚歲時記	50 夷堅志	51 五雜俎	52 福惠全書	53 水經注
54 洛陽伽藍記	55 元和郡縣志	56 天下郡國利病書	57 大清一統志	58 地方志
59 讀史方輿紀要	60 支那省別全誌	61 契丹國史	62 大金國志	63 元朝秘史
64 明代滿蒙史料	65 三國史記・三國遺事	66 高麗史・高麗史節要	67 李朝實錄	68 東國輿地勝覽
69 經國大典	70 宣和奉使高麗図経	71 大越史記全書	72 唐律疏議	73 唐令拾遺
74 名公書判清明集	75 元典章	76 明律國字解	77 九章算術	78 齊民要術
79 營造方式	80 本草綱目	81 天工開物	82 神器譜	83 農政全書
84 文史通義	85 十七史商榷	86 二十二史劄記	87 中国近代資料叢刊	
88 中国近代工業史資料	89 革命文獻	90 甲骨・金文史料	91 簡牘	92 敦煌文書
93 太平御覽	94 事林廣記	95 永樂大典	96 三才圖繪・和漢三才圖繪	
97 晦庵先生朱文公文集	98 大唐西域記	99 入唐求法巡禮行記	100 東方見聞錄	

③ レジューメの作り方とレジューメ見本

(1) 配布資料としてのレジューメ

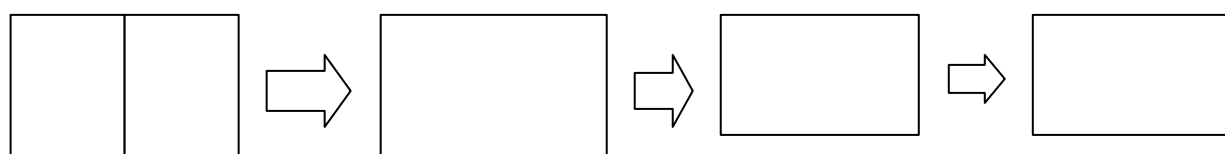
まれにレジューメの中には、レポートに書いた文章がそのまま載っているものがあります。これは極端な例ですが、レジューメは概要、要旨の意味だから、第一に量的に発表原稿よりもかなり短くなければならない。それも単なる発表内容の要約でなく、発表内容を聞き手に正しく理解してもらうための手助けとなるための配布資料です。

(2) レジューメはなぜ必要か

まず発表者自身のためです。レジューメにしたがって説明することによって、スムーズに過不足なく発表することができます。また固有名詞、漢字など正確を期す情報を板書に時間を費やすことなく、聞き手に誤り無く伝えることができます。図表や地図など口頭では伝えにくい情報を盛り込むことができます。

(3) レジューメの枚数と紙型

レジューメの紙型はB4に統一する。 B4で2枚程度



A4原稿2枚 → A3 → 縮小コピー B4 → 輪転機 → B4レジューメ

(4) 本文以外の記載事項

史籍の番号・史籍の名称 発表者の氏名 発表期日 頁

(5) 本文

横書き 必ずしもパソコンを使用する必要はない。手書きでもよい。ただし丁寧に。 理解しやすいようにレイアウトに工夫する。

(6) 本文の項目

書名（別称異称があればそれも）

巻数、内容編目（何が書いてあるのか）

著作者（正史のように多数編纂に関わっていれば、主だった人物を記載する）

成立年代（異なる時代に成立した部分が一書のまとめられた場合もある）

版本（書誌学・版本学の細かい説明は不要、大事なことは歴史史料として信頼性の高い版本はどれか、立命館大学にはどの版本があるかなどを明示）

注釈書（史記や漢書のように、本文は当然ですが注も同じくらい重要な書も多い。卒論作成などでは、邦語訳注本の存在も重要な情報となる）

参考書、『漢書語彙集成』のような研究解説の助けとなる書物の紹介も忘れずに。

史料的価値、同時代の他の史料と比較して必須の基本史料か、傍証的な史料か、など。

当該史料を使用した論文の紹介、論文中に引用された史料を示し、その史料をどう読んで、そこからどんな史実を引き出したかなどを示す。

最後に、レジューメ作成にあたって参考利用した文献一覧をつける。著者名、書名・論文名（論文であれば所収雑誌名、号数）、出版社名、出版年などを忘れずに。

(7) 不明な点はT.A.に尋ね、レジューメの下書きができたなら、見せて助言をうける。

新唐書

東洋史研究入門
1632xxxxxx-x 文学太郎

編者

◇曾公亮（999～1078）

字は明仲。泉州晋江（福建省晉江県）の人。北宋の宰相を10年間つとめた。『新唐書』を監修者として上進したが、巻頭の進書表を書いているだけで、事実上全く編纂には関係していない。

◇歐陽修（1007～1072）

字は永叔。北宋の政治家で学者。吉州廬陵（江西省吉安県）の人。父親を4歳で失って叔父を頼り、24歳で進士に合格。早くから韓愈の学風を慕い古文の復興を唱え、文章でも名を成し、宋代を通じて文豪と称された。『新唐書』の本紀・志・表のほとんどを執筆している。

◇宋祁 生没年不明

字は子京。北宋の官僚。安州安陸（湖北省安陸県）の人。兄とともに天聖（1023～1032）の初めに進士に及第。文学にすぐれ、欧陽修と同じく韓愈の学を慕っていた。『新唐書』の列伝をうけもっている。

執筆の多くは上記の欧陽修と宋祁の手によるものだが、他にも范鎮・王嚳・宋敏求・呂夏卿・劉義慶・梅聖俞ら多くの学者が関係している。

成立年代・成立過程

唐代の正史としては、すでに五代後晋の開運2年（945）に趙瑩らによって編纂された『唐書』があったが、宋の統一後、唐代の史料が多数発見され、これを補正しようという気運が高まり、北宋の仁宗が慶暦4年（1044）に詔して、17年後の嘉祐5年（1060）に新たな『唐書』が完成した。これ以後、趙瑩らのものを『旧唐書』、欧陽修らのものを『新唐書』、または単に『唐書』とよぶようになった。

『新唐書』の編纂は、宋の統一後、唐代の史料が多数発見され、これを補正しようという気運が高まり、北宋の仁宗が慶暦4年（1044）に詔して、17年後の嘉祐5年（1060）に新たな『唐書』が完成した。これ以後、趙瑩らのものを『旧唐書』、欧陽修らのものを『新唐書』、または単に『唐書』とよぶようになった。

『新唐書』の編纂は、宋の統一後、唐代の史料が多数発見され、これを補正しようという気運が高まり、北宋の仁宗が慶暦4年（1044）に詔して、17年後の嘉祐5年（1060）に新たな『唐書』が完成した。これ以後、趙瑩らのものを『旧唐書』、欧陽修らのものを『新唐書』、または単に『唐書』とよぶようになった。

『新唐書』の編纂は、宋の統一後、唐代の史料が多数発見され、これを補正しようという気運が高まり、北宋の仁宗が慶暦4年（1044）に詔して、17年後の嘉祐5年（1060）に新たな『唐書』が完成した。これ以後、趙瑩らのものを『旧唐書』、欧陽修らのものを『新唐書』、または単に『唐書』とよぶようになった。

※『縮印百衲本二十四史』 北京商務印書館 1958年
『二十四史 唐書』 汲古閣本 同治12年浙江書局刊
※『仁寿本二十五史 唐書』 北宋刊小字本 台北二十五史編輯館
※『唐書』 堀正修校訂 寛延元年京錢屋三郎兵衛等刊本
※『新唐書』 中華書局校点本 1975年
※は立命にあるもの。

注釈書・参考書

※『唐書注』10巻 清・唐景崇 北京 余業昌 1935年
『新旧唐書合鈔』260巻 清・沈炳震 海昌奎氏刊 嘉慶18年
※『新旧唐書互証』20巻 清・趙紹祖 台北芸文印書館 1964～66年
※『唐書直筆新例』4巻 宋・呂夏卿 台北藝文印書館 1964～66年
※『新唐書糾謬』20巻 宋・吳棫 台北芸文印書館 1964～66年
※『新旧唐書人名索引』 張万起編 上海古籍出版社 1986年
『新唐書宰相世系表引得』 哈仏燕京学社
※は立命にあるもの。

史料の価値

『新唐書』の記述があまりにも主観的であるのは史書として大きな欠点だが、だからといって決してこれが史料的に無価値であるというわけではなく、豊富な史料に拠っている点に重大な価値がある。例えば食貨志などは、唐代の社会経済の動きが詳細に記されており、唐代史研究者にとって欠かすことのできないものである。しかし今まで述べてきたような理由から、『新唐書』を史料として利用する際には必ず該当部を『旧唐書』など他の史料を併せて参照し、その異同を確かめねばならない。また、『新唐書』独自の記事を利用する場合は、原文の慎重な史料批判が必要となる。

『新唐書』を用いた研究論文

鈴木俊 「新唐書食貨志の史料考察」 『岩井博士古希記念典籍論集』 1963年

この論文のなかで著者は、食貨志の記述を史料的に見て、「（1）直接に拠った材料はなく、編者の考えて書いた作文的なもの、（2）拠った材料が、現存の史籍に見当たらないので、史料の系統やその価値を明らかにしがたいもの、（3）拠った材料が、現存の史籍に見えていて、だいたいその史料の系統を知りうるもの、ただしこれには書きかえられ、

『新唐書』の特色と問題点

『新唐書』の長所も短所も、編纂の中心人物である欧陽修と宋祁が共に韓愈に心酔していたということにほとんど綿着する。『新唐書』には韓愈の提唱した古文の復興という考えが遺憾なく発揮されていて、その文体はすべて古文である。正史全体を一つの文体で統一したことは画期的で、以後この方法が模範として用いられるようになった。

確かに『新唐書』は、文章が流麗簡潔で文学的にもすぐれ、監修者の曾公亮も「その事は前より増し、その文は旧より省く」と誇っている。しかし、『旧唐書』が史料をそのまま記しているのに対し、『新唐書』は古文を重んじるあまり詔令表奏の類まで改作したため、その史料的价值を傷つけている。また、文章を簡単にし過ぎて意味がわかりにくい場合があったり、史料の扱いが不十分で事実を誤っている場合も多い。とりわけ紀伝に小説を材料としたのは問題である。

このようであったため、すでに編纂当初から欧陽修と宋祁の意見が分かれ、編纂者間にも異論があった。編者の一人である呂夏卿は『新唐書』編纂時、すでに『唐書直筆新例』4簡を書し、史法についての見解や、『旧唐書』と比較した『新唐書』などについて記している。また、呉嚳は『新唐書』が完成してすぐ、その錯誤を指摘した『新唐書糾謬』20巻を書して400余事の誤謬をあげている。

内容・編目

『新唐書』は、本紀10巻、志50巻、表15巻、列伝150巻の計225巻からなる。その長所として、志・表を充実させたことなどが挙げられる。

巻1～10 本紀、巻11～22 禮樂志、巻23 儀衛志、巻24 車服志、巻25～30 曆志、巻31～33 天文志、巻34～36 五行志、巻37～43 地理志、巻44～45 選舉志、巻46～49 百官志、巻50 兵志 巻51～55 食貨志、巻56 刑法志、巻57～60 藝文志、巻61～63 宰相表、巻64～69 方鎮表、巻70 宗室世系表、巻71～75 宰相世系表 巻76～225 列伝

版本

『唐書』 北宋嘉祐刊本
『二十一史 唐書』 萬曆中國子監刊本 萬曆23年刊
※『十七史 唐書』 汲古閣刊本 崇禎2年刊順治5年補輯
『唐書』 武英殿本 上海同文書局 台北藝文印書館 上海開明書店
『百衲本二十四史 唐書』 上海商務印書館

『新唐書』の編纂は、宋の統一後、唐代の史料が多数発見され、これを補正しようという気運が高まり、北宋の仁宗が慶暦4年（1044）に詔して、17年後の嘉祐5年（1060）に新たな『唐書』が完成した。これ以後、趙瑩らのものを『旧唐書』、欧陽修らのものを『新唐書』、または単に『唐書』とよぶようになった。

『新唐書』の編纂は、宋の統一後、唐代の史料が多数発見され、これを補正しようという気運が高まり、北宋の仁宗が慶暦4年（1044）に詔して、17年後の嘉祐5年（1060）に新たな『唐書』が完成した。これ以後、趙瑩らのものを『旧唐書』、欧陽修らのものを『新唐書』、または単に『唐書』とよぶようになった。

造作が加えられ、なかにはあまりに記述が簡略にされて、その拠った材料を知るのに困難なものもある」に大別できるとしている。そして、新唐書食貨志の史料研究において重要な問題の一つは、（2）に属する、新たに加えられた記事が、何に拠ったかを明らかにすることであるとして、例を挙げて新唐書食貨志の記事の史料関係を述べている。

参考文献

『アジア歴史辞典』 下中邦彦 平凡社 1959年
『アジア歴史研究入門』 同朋舎出版 1983年
『中国史籍解題辞典』 神田信夫・山根幸夫編 燎原書店 1989年
『新編東洋史辞典』 京大東洋史辞典編纂会 東京創元社 1980年
『大漢和辞典』 諸橋轍次 大修館書店 1986年
『支那史学史』 内藤湖南 平凡社東洋文庫 1992年
『新唐書』 古賀登 明德出版社 1971年
『新唐書に就いて』 岡崎文夫 『史林』21－1 1936年

4 レポート・論文の書き方

(1) レポート・論文の違い

レポートとは「程度の差こそあれ多少の研究調査にもとづいて書かれた報告一般」で、論文とは「注をつけた研究の裏付けのある」もので、大学では卒業論文、修士論文、博士論文などがある（澤田昭夫『論文の書き方』中公文庫、18～21頁）。両者の本質の違い、厳密な境目はないようだが、常識的には論文の方が枚数が多く、内容的により高度なものといえるだろう。

(2) テーマの設定

レポートも論文もテーマが必要です。研究入門の史籍解題レポートでは担当書目は決まっているから問題はないが、他の科目の場合では、自由なテーマで書くよう求められることもある。ただ自由と言っても自ら限界があるのは当然で、講義の中で言及された諸問題の中から1つを取り上げるのが常識的です。

これが論文（当面は卒業論文）となると、自分の能力による制約を別にすれば、テーマに関して殆ど制約はない。自分の興味に従ってテーマを設定すればよい。そのテーマも最初から細かい内容のテーマ設定をする必要はない。例えば「科学は本当に能力主義であったか」とか「中国では君主独裁は時代とともに強化されていったか」といった大まかなものから出発してよい。

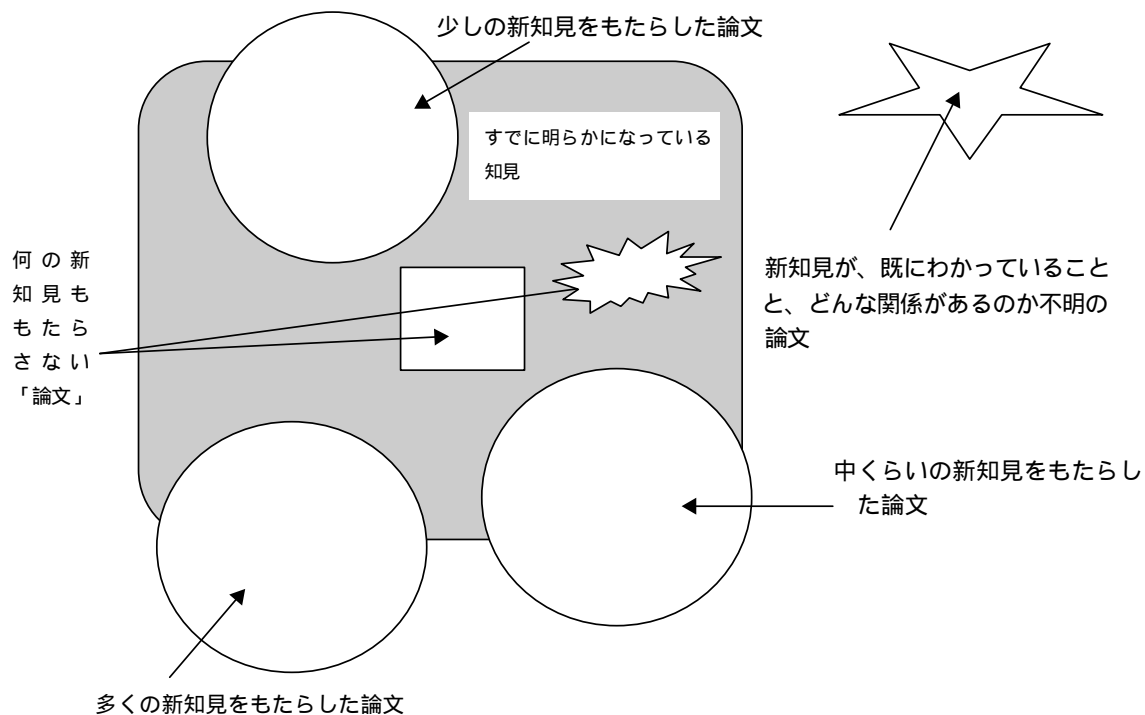
(3) テーマの絞り込み・テーマの変更

次に大まかなテーマに従って、関連のありそうな文献をよんでみる。必ずしも難解な研究論文からではなく始めに概説書・入門書などから読み進み、テーマ周辺の情報を集めていく。例えば、科学について調べるとする。Runnersで検索すれば、おそらく宮崎市定『科学』（中公新書）と、村上哲見『科学の話』（講談社現代新書）がひっかかってくるだろう。この2書を読むだけで相当な知識を仕入れることができる。さらに、J.K.フェアバン著、大谷敏夫・太田秀夫訳『中国の歴史 - 古代から現代まで』（ミネルヴァ書房、1996）を見ると、116～120頁になり詳しく問題点が指摘してある。科学が専制君主、官僚制、貴族、新興地主層、儒教、学校制度、社会移動、郷紳、宗族などの諸問題と深く関わっていることが理解できるだろう。テーマはより具体的にそして細かくなっていく。調べていくうちにテーマが変わっていくこともある。そうしたことは卒業論文作成の過程でもよく起ることで学習が進んだ証拠であって何の問題もない。

(4) 先行研究（研究文献）の探索

テーマが決まったら、先行する研究文献を網羅的に集めなければならない。**研究文献（略して文献）を探す方法としては、まず本書の7 - (11) にしたがって進めればよい。**その他、Runnersから検索するのも良いし、手取り早く学生共研にいる院生に聞くのもよい。本学に所蔵していなければ、図書館レファレンスを通じて取り寄せてもらう。文献の著者名、論文タイトル、収録雑誌名、発表年などの情報はノートに記録しておく。必要なものはコピーをとる。

なぜ先行する研究文献を網羅的に収集しなければならないのか。専門家でも論文を書き上げた後に、自分が苦労して論証した答えを、何年も前に誰かがちゃんと研究し発表していたことに気がつくことがある。たとえ自分が10年も前に構想していたのにと口惜しがっても仕方がない。「知らなかった」は、もっと理由にならない。1日でも早く発表したものが勝ちです。同じことを言うのであれば、先に発表された論文に敬意を表し引用する。これがこの世界の仁義であり、論文作成という営為の本質です。レポートでは必ずしも「新発見」を必要としないが、一般には何か新しいことを付け加えたものを論文とよびます。



（５）文献の検討

コピーをとってしまうと、安心してしまっ、そこで一休みしてしまう人がいるが、研究文献は読まなければ意味がない。前述のように、先ず、すでに分かっていることと、まだ分かっていないことを確認することが最初に行う作業です。自分の抱いていた疑問の答えが先行論文（同じテーマで既に刊行された論文）のなかに書かれてあれば、新たに論文を書く必要がないから、テーマを変更しなければならない。しかし先行論文の結論に納得がいかなければ、その論文への反論という形の論文を書けばよい。多くの場合、論文を読み進めていくうちに、関心が変わったり、別の関心がうまれたりするものですから、テーマの変更したいそんなに心配する必要はありません。

研究文献を読むことと、楽しみながらの読書とは大分ちがいます。先ず、研究文献の著者名、論文タイトル（または書名）、収録雑誌名、発表年の情報は、ノートやカード、場合によってはパソコンに記録しておく。後日、論文やレポートに引用するために必要になるからです。次に、論文のなかの重要な事項を見出し風に短い語句でメモをとりながら、読みすすめる。メモの内容としては、注などに引用されている先行論文、関連論文の情報、当該論文が批判の対象としている研究者は誰か、どの論文か。

使用している史料の名称。著者名、書名（版本、収録叢書名）、巻数、論文の題名、所蔵場所などの情報。

（６）史料の収集

先行論文を読む過程で、そのテーマに必要な史料の種類も判明する。その史料がどんな種類の史料なのか、本学で見ることができるかどうかを確かめる。調べ方は、本書の 7 - (9) 漢籍目録、(10) 史籍解題の項目にしたがって進めます。本学に所蔵しない場合、どうしても必要であれば、他の所蔵機関まで実際に足を運ばなければならないこともあります。目的の史料を手にすることができたら、先行の研究文献に引用された箇所を確認し、コピーをとります（筆写のみ可で、機械によるコピーが許可されない研究機関もあります）。その場合、引用箇所を中心になるべく広い範囲をコピーしておくことが大切です。引用箇所的前後に新しい発見があることは少なくないからです。

卒業論文などでは、先行論文の引用箇所を読むだけでは、新事実の発見の可能性は大きくないから、史料の収集圏を拡げる必要がでてきます。同じ史料の他の部分、同時代の別の史料、前後の時代の史料と範囲を拡げて調査していきます。この作業は時間もかかるし、その上、欲しい記事があるかどうかの保証もありません。となると、これはなかなか忍耐力を要する作業です。だからこそ、史料のストックが増えていくのは、論文の完成に一步一步近づいていくようで心弾む作業でもあるわけです。

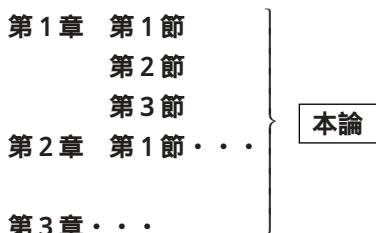
（７）史料の読解

まず自分で訓点を施し読んでみる。次に引用箇所の前後も含めて読んで見よう。納得のいく読みが得られなければ、他人に聞くなり辞書を引くなり、とにかく筋を通して読むことが大事です。どうしても読めなければ、その史料は置いておいて次の史料に取りかかります。ふっと読み返したとき読めるようになることがあります。また、史料を読んでいて気がついたアイディアなどは、すぐに余白に書き込む癖をつけましょう。ひとつひとつは零細でも、一定の量に達したメモは何にも代えがたい財産になります。

（８）章だて

一般にレポートや論文では、論証する内容の論理構成に従って章や節を立てて分けて叙述されます。簡単に言えば、どの章に何を書くか項目を配置することです。具体的なやり方としては、１枚の紙にフローチャートのような一覧表をつくって書き込んでいき、最も効果的な構成にしていきます。

序（もしくは、「はじめに」）・・・問題意識や関心、何を明らかにしようとするのか。



結語（もしくは、「おわりに」）・・・何をどう明らかにでき、何を明らかにできなかったか。

注

参考文献

（９）下書き・清書

かならず「序」「はじめに」から書き始めなければならないと思っている人がいるようですが、論文を書くのに正しい順序などありません。書きたいことから書く、考えがまとまったところから書くのが原則です。最後に「序」を書くのは誰もが経験するところです。手書きでも、ワープロ打ちでも基本的には同じですが、ワープロの場合、下書きと清書を厳密に分けることはできないし、する必要もありません。

（10）漢字の旧字と常用漢字の字体

どちらの字体を使っても良いが、どちらかに統一することが原則です。注意を要するには「芸」と「藝」のような場合です。この２字は、現在日本では同じ字の異体字としていますが、実は意味も読みも「ウン」と「ゲイ」、異なる字です。とくに史料の引用では旧字体を使用すれば、こうした間違いも防ぐことができます。また、中国で使用されている簡体字は、日本の字体に戻して書くようにして下さい。

（11）漢文史料の引用

漢文史料を本文中に引用するときは、本文よりも２字分下げて書く。必ず訓点を施すか、書き下し文にする。書き下し文にした場合は、注に原文を掲載する。

（12）レポート、論文の文体について

文体は口語体を原則とし、「である」調がふさわしい。まれだが、女性の中に「女言葉」をまじえる人がいる。論文の文体は中性的である方がよい。

（13）センテンスの長さについて

原稿用紙の半頁から一頁にわたる、読んでいて息切れするような長いセンテンスを書く人がいるが、意識してセンテンスは短めにする。途中で主語が変わる文章もだめです。前後関係から明白である以外、主語のない文章もだめ。簡潔を心がけましょう。「しかし、すなわち、また、したがって」などの接続詞の多用も文意を不明瞭にします。

(14) 段 落

まったく段落のない文章を見かけます。書き手は気がついていないかもしれませんが、かなり読みづらい文章の代表です。内容の区切りにしたがって段落をつくるのが自然であり、読み手にとっても理解しやすい。改行したら、1字分下げて書き始める。枚数がせぎのための意味のない段落や改行は論外です。

(15) 引 用

他人の著書・論文から文章をそのまま引用する場合、「」⁽¹⁾のように「」でかこみ、右下に両カッコで数字を挟み、通し番号をふる。パソコンの注機能を使うと簡単にできる。引用文が句読点で終わる場合は「。」「、」でも「。」「、」でもどちらでもよい。

(16) 原稿用紙を使用

句（。）読点（、）が行の最後にきた場合、次行の最初のマスに書かないで、行のマスの外に書く。アラビア数字は1マスの2字とし、漢数字は1マスの1字を当てる。アルファベットは大文字は1字1マス、小文字は2字1マスを使う。

(17) 「れる」「られる」について

「思われる」「考えられる」といった文章をよく見かける。文法的にいうと「自発」の助動詞です。この「れる」「られる」は多用しない方がよい。大変便利なのでつい使ってしまうが、できるだけ「思う」「考える」と書くことができることは、そのように書くように心がけましょう。どこが違うのか。「思う」「考える」とすれば、主語の「私」が主張されているのに対し、「れる」「られる」を使うと、ついつい「私」は「世間の常識」の後ろに隠れようとする。

(18) レポ - ト、論文の中の研究者への敬称について

論文では研究者の名前を引用する場合、一般には呼び捨て、すなわち敬称は省略する。呼び捨てが気になるひとは、「氏」くらい付けばよいだろう。「先生」の敬称は、受業生（直接の教え子）以外はあまり使用しない。欧文では「教授」「博士」が使われるが、付けるならば文中の該当する全員に等しく使用しなければならない。敬称の省略は、そうした煩雑を避けるための便利な方法でもあります。

(19) 注のつけかた（註とも書く）

論文の形式的必要要件の一つに、注があります。注の意味は、論述の根拠を明示し、論述が確実なものであることを保証するためのものです。注は論文の「付けたり」のように見えるかもしれませんが、研究論文では重要な意味をもっています。一見して論文と随筆、学術書と啓蒙書の違いを見分けるのに、注の有無を基準にします。もちろん注のあるものが、研究論文であり、学術書です。研究論文では行論に用いられた根拠のひとつひとつについて、情報開示されていなければなりません。

かつては特に教えてもらうことなく、自分で論文や研究書を読んだり、書き写したりして、まねをしたものです。ただ絶対的な基準というものは存在しません。邦文と欧文、横書きと縦書きでも若干の違いがあり、ここでは原則的なものを述べるにとどめます。

注の種類

注には、形式によって2種類ある。(a)脚注 (b)巻末注（後注） (c)頭注・冠注（本文の頭部に付した注）とがある。(c)はあまり使わないので省略します。東洋史の卒業論文の場合は「縦書き」にするよう指定されていますが、レポートなどでは「横書き」指定もある。基本的にはどちらも同じです。

脚注

脚注foot noteは、欧文論文によく使用されます。東洋史の卒業論文では原稿用紙の下部に脚注スペースがとってあり、脚注をつけることができるようになっています。しかし一般のレポートでは脚注を附すほどの厳密さは要求されていません。必要があれば、（ ）を附して本文の中に入れてしまえばよい（割注という）。邦文論文の脚注について要点を言えば以下の通りです。

極く短い文章で説明できる内容であること。

中国などの歴史的度量衡（尺・丈・歩・里、畝・頃など）を現在の度量衡になおして示す場合。

歴史的地名に対して現在の地名を示す場合。

引用文・引用文献・引用史料などの出所を示すための書名・巻数・頁数を示す場合。

巻末注

巻末注は章ごとにその末尾に付ける場合もあるが、卒論程度の長さでは、一括して最後に付けるのがよいだろう。巻末注の特徴は以下の通りです。

本文で言及した論拠以外の補完的論拠（論文や史料など）を示す場合。

あまり一般的でない言葉や概念についての説明。

他の学説にたいする批判や自分の考えを述べるのに、煩瑣を避けて本文中でなく注にまわす場合。

本文中に引用した史料の原文。

論文の場合

著者名、論文名、掲載書名（雑誌名）、発行年月日、発行所、巻数、ページ数などを書く。論文名は「 」で囲み、書名は『 』で囲む。具体例として、金子修一「中国古代における皇帝祭祀の一考察」（『史学雑誌』87 - 2、1978）から引用する。＊原文は縦書き

注（１）本文に掲げたものの他には、栗原朋信「史記の秦始皇本紀に関する二・三の研究」（同氏『秦漢史の研究』1960年、所収）、西嶋定生「皇帝支配の成立」（『岩波講座世界歴史』第4巻所収、1970年）がある。（以下省略）

（２）細かく見れば前漢と後漢とでは若干の相違がある。前漢では新皇帝の高廟に謁するのみであったが、後漢では高廟に謁した翌日に光武帝廟（世祖廟）に謁するのが礼であった。（以下省略）

（３）前掲拙稿「唐代の大祀・中祀・小祀について」参照。（以下省略）

（13）原文は次のとおり。

諫議大夫賈会上表曰、（中略）謹按禮祭法曰、有虞氏禘黃帝而郊嚳、夏后氏禘黃帝而郊鯀、傳曰、大祭曰禘、然則郊之與廟、俱有禘祭・・・（以下省略）

史料の引用

編年史料の場合。必要箇所を明示したい場合、次のように書く。

『資治通鑑』巻277、長興2年6月丙子。

『続資治通鑑長編』巻244（巻二四四）、熙寧6年4月庚辰（熙寧六年四月庚辰）。

『資治通鑑』の著者は言うまでもなく北宋の歴史家で政治家の司馬光です。余にも有名であり省略することが多い。『続資治通鑑長編』の場合はどちらでもよい。ついでによく使う長い書名の省略形について触れておくと、書名のすぐ後に（以下『長編』と略す）と書いて、次に引用するときは『長編』だけですますことができます。また、縦書きの場合には、アラビア数字（1、2、3・・・）でなく、漢数字（一、二、三・・・）を用いる。漢数字では適当に十、百、千を用いてもよい。

個人文集の場合。眞徳秀『西山先生眞文忠公文集』巻40、潭州諭同官咨目、のように書く。眞徳秀という人物は宋代史研究者の間では有名人ですが、例えば近代史研究者には必ずしも自明ではない。そんな場合「南宋、眞徳秀」と書く方がよい。たとえば、唐代史の場合、大まかな時代表示のために「初唐、中唐、盛唐、晩唐」などの語が用いられることもある。

また中国の書籍の場合、同じ書名の書物でも編集や校訂された年代によって字句や巻数の異なるものが少なくありません。とくに四書五経のような古典にそうした事例が多く見られます。その場合、版本の種類を明示しなければならない。正史の様なポピュラ - な史料でも版本によって、字句の違いが多く見られるからです。

北宋、司馬光『資治通鑑』294巻（二九四巻）と書く場合があります。数字と巻の字の位置関係に注意してください。○○巻と書く場合は、その書物が全巻で何巻と言う意味です。巻○○つまり、先述の『資治通鑑』巻277、長興2年6月丙子、と書く場合は、その書物の特定の箇所を示す書き方になります。

次に欧米の文献などの引用法について、

論文の場合、

Joseph R. Allen., "Standing on a Corner in Twelfth Century China: A Semiotic Reading of a Frozen Moment in the Qingming shanghe tu" *Journal of Sung-Yuan Studies*, 1997, no.27, pp.109~125. のように書く。論文タイトルは“ ”

で困む。掲載雑誌名はイタリック体にする。一ヶ所だけの引用であれば、p.109でよい。

著書の場合、

William T. Rowe., *Hankow : Conflict and Community in a Chinese City, 1796~1895*, Stanford University Press, Stanford California, 1989, pp.91~134. のように書く。ここでも書名はイタリック体で書く。

欧文略語

欧文で論文を書くことはあまりないと思うが、読まなければならない機会は少なくない。欧文論文には幾つかの省略語がある。とくに欧文論文の注には多用されているので知っておくと便利です。邦文論文に欧米語論文を引用する時も一部以下の省略語を準用する。

ibid./ ib. = ibidem 「同上書」

op. cit. = opero citato 「前掲書（論文）」

loc. cit. = loco citato 「前引の箇所」

cf. = confer 「参照せよ」

etc. = et cetera 「等々、その他」

v. / vid. = vide 「見よ、参照せよ」

N. B. = nota bene 「注意、備考、但し」

5 参 考 書

(1) 入門用

レポートや小論文を作成するための参考書としては、保坂弘司『レポート・小論文・卒論の書き方』（講談社学術文庫）、澤田昭夫『論文の書き方』（講談社学術文庫）、澤田昭夫『論文のレトリック - わかりやすいまとめ方』（講談社学術文庫）、鷺田小彌太『入門・論文の書き方』（PHP新書）をあげておくが、ただ読んだだけではうまく書ける訳ではない。

概説書としては、J.K.フェアバンク著、大谷敏夫・太田秀夫訳『中国の歴史 - 古代から現代まで』（ミネルヴァ書房、1996）と、宮崎市定『中国史』上・下（岩波全書、1978）を推薦したい。フェアバンクはアメリカにおける近代中国研究の第一世代を代表する研究者で、1979年にハーバード大学の教壇を去るまでに多くの中国研究者を育てた。578ページにのぼるこの書は、彼の遺稿（1991年）です。この書は世に一般的な概説書と違って細かな歴史事項についての説明的な記述は無いし、各時代に充てられた頁数も均等でない。各時代の記述は問題提起的であり論点がわかりやすく述べられている。後者は、最後の碩学と言われた著者が、日本ではめずらしく一貫して自らの歴史観にしたがって書いた概説書です。

以下の人物叢書は、専門家が中国史上著名な人物を伝記的に描いたもので、人物の生涯を通じて各時代相を理解できるようになっています。

『中国人物叢書』第一期全12巻（人物往来社、1966） 項羽 諸葛孔明 劉裕 隋の文帝 安祿山 馮道 文天祥 忽必烈汗 朱元璋 永樂帝 林則徐 曾国藩
『中国人物叢書』第二期12巻（人物往来社、1967） 漢の高祖 唐の太宗 玄奘三蔵 白楽天 王安石 蘇東坡 王陽明 奴兒哈赤 黄宗羲 康熙帝 李大釗 毛沢東
『中国歴史人物選』全12巻（白帝社、1994） 秦の始皇帝 ゴビに生きた男たち—李陵と蘇武 西晋の武帝司馬炎 則天武后 范仲淹 司馬光とその時代 朱熹 耶律楚材とその時代 明の太祖 顧炎武 ヌルハチ 林則徐

以下の書は、いずれも専門家でなく一般読者を想定した著作です、高度の内容を平易な文章で書かれたものも少なくありません。文庫本や新書ですから、たいいてい本屋さんで並んでいるので、入手しやすいものです。

岡田英弘『歴史とはなにか』（文春新書） 宮崎市定『科学』（中公新書）
岡田英弘『康熙帝の手紙』（中公新書） 北博昭『日中開戦』（中公新書）
大杉一雄『日中十五年戦争史』（中公新書） 三田村泰助『宦官』（中公新書）
小島朋之『中国現代史 - 建国50年、検証と展望 -』（中公新書）
加地伸行『中国人の論理学 - 諸氏百家から毛沢東まで』（中公新書）
天児慧『中華人民共和国史』（岩波新書） 小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』（岩波新書）
三上次男『陶磁の道』（岩波新書） 飯沼二郎『風土と歴史』（岩波新書）
可児弘明『香港の水上居民——中国社会史の断面』（岩波新書）
藪内清『中国の科学文明』（岩波新書） 斯波義信『華僑』（岩波新書）
戸張東夫『映画で語る中国・台湾・香港』（丸善ライブラリー）
波多野善大『東アジアの開国』（中国文明の歴史10、中公文庫）
宮崎市定『中国のめざめ』（中国文明の歴史11、中公文庫）
内藤戊申『人民共和国の成立』（中国文明の歴史12、中公文庫）
呉喰原作、堺屋太一『超巨人・明の太祖朱元璋』（講談社文庫）
姚雪垠著、陳舜臣・陳謙臣訳『叛旗 小説李自成』（徳間文庫）

(2) やや専門的

『地域からの世界史』全21巻、朝鮮・中国（上下）・東南アジア・南アジア・内陸アジア・西アジア（上下）（朝日新聞社、1992～）

『世界歴史体系』中国史全5巻（山川出版社、1996～）
『岩波講座 世界歴史』全28巻別巻1（岩波書店、1998～）
『岩波講座 世界歴史』全31巻（岩波書店、1969～74）は、前掲書と同名ですが、内容はまったく別です。30年前の歴史研究が何を議論していたかを知るのにはよい。
橋本万太郎『民族の世界史5 漢民族と中国社会』（山川出版社、1983）
毛利和子『現代中国政治』（名古屋大学出版会、1993）
溝口雄三『中国の公と私』（研文出版、1995）
大澤正昭『主張する 愚民 たち 伝統中国の紛争と解決法』（角川書店、1996）
杉山正明『モンゴル帝国の興亡（上下）』（講談社現代新書、1996）
上田信『エコロジカル・ヒストリー 森と緑の中国史』（岩波書店、1999）
中嶋嶺雄『中国 - 歴史・社会・国際関係』（中公新書） 三石善吉『中国、一九〇〇年』（中公新書）
加地伸行『現代中国学』（中公新書） 陳舜臣『実録アヘン戦争』（中公新書）
竹内実『毛沢東』（岩波新書） 保坂正康『蒋介石』（文春新書）
竹内実『日本人にとっての中国像』（同時代ライブラリー120、岩波書店）
宮崎市定『雍正帝 - 中国の独裁君主 - 』（中公文庫） 矢野仁一『アロー戦争と圓明園』（中公文庫）
堀川哲男『林則徐 - 清末の官僚とアヘン戦争 - 』（中公文庫）
宮崎滔天『三十三年の夢』（岩波文庫）
近藤紘一『目撃者 - 近藤紘一全軌跡1971～1986より - 』（文春文庫）
イザベラ・バード、時岡敬子訳『朝鮮紀行 - 英国婦人の見た李朝末期 - 』（講談社学術文庫）

6 雑誌（月刊誌など）

『史学雑誌』（史学会・東京大学）『史林』（史学会・京都大学）『歴史学研究』（歴史学研究会、青木書店）『社会経済史研究』（社会経済史学会）は歴史学分野の論文を掲載した研究雑誌で、東洋史分野専門の研究雑誌としては、『東洋史研究』（東洋史研究会）『東方学』（東方学会）『東洋学報』（東洋文庫）などがあります。『立命館史学』（立命館大学文学部史学科）『立命館東洋史学』（東洋史専攻）のように、各大学には歴史学専門の研究雑誌を刊行しています。『史淵』（九州大学）・『史苑』（立教大学）・『史学』（慶応大学）・『史学研究』（広島大学）・『史観』（早稲田大学）・『史泉』（関西大学）・『史艸』（日本女子大学）・『史窓』（京都女子大学）など。

“T'oung Pao”（通報）（Leyden, Brill）1890年創刊。

“Harvard Journal of Asian Studies”（略称HJAS、Harvard-Yenching Institute）

“Journal of American Oriental Studies”（略称JAOS、American Oriental Society）

“Journal of Asian Studies”（略称JAS、Association of Asian Studies）以上3種はアメリカの雑誌。

中国の雑誌。考古学関係では、中国社会科学院考古研究所編『考古学報』（科学出版社）『考古』（科学出版社）『文物』（文物出版社）がよく知られている。歴史学では『歴史教学』『中国史研究』『史学月刊』『近代史研究』『故宫博物院院刊』などの専門雑誌の外、『北京大学学報（哲学社会科学版）』『復旦学報（社会科学版）』のように各大学から研究誌が発行されている。

7 東洋史研究のための基本工具類

（1）辞典

A, 『大漢和辞典』全15巻（索引1巻・語彙索引1巻・補巻1巻）（諸橋轍次、大修館書店）通称「モロハシ」、図書館、文献資料室、学生共研に置いてある。手持ちの辞書で不明の場合、満足できないときは、その語彙だけでもモロハシをひいてみよう。ただし25万2千円。以下の漢和辞典も手元に置くには少し高価ですが、図書館や文献資料室に備えてあるので利用しましょう。

『広漢和辞典』4巻（諸橋轍次、大修館書店）は、『大漢和辞典』の簡略版で、6万7千円。以下は、解説文が華文で書かれているので、入門段階では少し使いづらいかもしれない。

『中文大辞典』40冊（国防研究院、1968）

『漢語大字典』10巻（四川辞書出版社・湖北辞書出版社、1986～94）

『漢語大詞典』13巻（上海辞書出版社、1986～94）

B, 『字源』（簡野道明、角川書店、1923）『大字典』（上田万年、講談社、1917）『漢和大辞典』（藤堂明保、学習研究社、1980）『角川漢和中辞典』（貝塚茂樹ら編著、角川書店、1962）『三省堂新漢和中辞典』（長沢規矩也、三省堂、1967）『大漢語林』『漢語林』（鎌田正・米山寅太郎著、大修館書店）など漢和中辞典は店頭にかくさんならんでいるので、気に入ったものを選んで、ぜひ買って置いて欲しい。大きさの目安は枕になるていどの厚さが適当。

C, 『新字源』（小川環樹、角川書店、1968）は、史料解読には物足りないが、教室ではハンディで便利であり、巻末の付録もけっこう役に立つ。

（2）漢文法解説書

訓読法で漢文を読むには、基本的な約束事を知っておかなければならない。最初は高校の漢文の教科書や参考書に書いてある程度の文法を理解していればよい。例えば、『新 ひとりで学べる漢文』（清水書院）『読解の基礎・漢文の焦点』（研数書院）『基礎からわかる漢文』（日栄社）のような、受験参考書があれば、もう一度読み返してみよう。1回生配当の「漢文史籍読解」は、漢文入門として置かれた科目です。しっかり基礎を身に付けてほしい。とにかく辞書を引くことです。英語やドイツ語ならば辞書を引くのに、漢文にはるくに辞書を引かないで、分からん、分からんという横着者がいますが、漢文は外国語であることを忘れてはいけません。以下に、現在入手できる解説書をあげておきます。

柳町達也『漢文読解辞典』（角川書店、1978、1800円）

中澤希男・渋谷玲子『漢文訓読の基礎』(教育出版、1985、3914円)

西田太一郎『新訂 漢文法要説』(朋友書店、1500円)

天野成之『漢文基本語辞典』(大修館書店)

吉儀壽雄『訓読による読解の爲の中国古典文法』(日本教育研究センター、1989、7000円) 手ごろな価格のものでは、奥平卓『漢文の読みかた』(岩波ジュニア新書147、岩波書店、580円)がある。

最近「音読」のすすめが流行っていますが、漢文の音読は昔から日本人が漢文習得の実践的な技術の1つです。安達忠夫『素読のすすめ』(講談社現代新書、1986)によれば、漢文の音読は頭脳に良い刺激を与えるらしい。

(3) 事 典

『アジア歴史事典』(平凡社、1962、10冊、通称「アジ歴」)は現時点で最も詳しい事典。図書館、文献資料室、学生共研にある。

『新編東洋史辞典』(京大東洋史研究室、東京創元社、増補版、1980)はとてもコンパクトで適当な詳しさと、役にたつ。座右においておきたい書のひとつ。

(4) 人 名

臧勵舫『中国人名大辞典』(商務印書館、1921)

人名専門の辞典だが、出典が明記されていないところに難がある。

『現代中国人名事典』(霞山会)

むしろ、よく使うのは正史・列伝の索引で、『二十五史人名索引』(同編纂委員会、1935)、『二十四史伝目索引』(梁啓雄、1936)。いずれも台湾の復刻有り。その他に、『標点本正史』の刊行に併せて編纂された人名索引は、列伝のみならず本紀、志などの登場箇所を示しており便利です。それぞれの人名索引が有る。EX)『晋書人名索引』(中華書局、1977、北京)。漢文が苦手なむきには、“モロハシ”、“アジ歴”にもかなり人名が載っている。

人名に関する情報源は正史だけではない。墓誌銘や地方志などの雑多な史料を材料に人名索引が作られている。宋代を例にすれば、以下の書が刊行されているが、各時代にも同種の索引・人名事典があるから、論文作成に際しては是非利用すればよい。

『四十七種宋代伝記綜合引得』(引得34、哈仏燕京学社、北京、1939)復刻多数あり。

青山定雄編『宋代伝記索引』(東洋文庫、1968)

王德毅等編『宋人伝記資料索引』全6冊(鼎文書局、1974)

Herbert Franke Edit., *Sung Biographies*, Franz Steiner Verlag GMBH・Wiesbaden, 1976.

(5) 地 名

臧勵舫『中国古今地名大辞典』(商務印書館、1931)。歴史的地名に関しては、

『読史方輿紀要』(清、顧祖禹、各種洋装版あり)がくわしい。これを読むには、『読史方輿紀要索引歴代地名要覧』(青山定雄、大安、1965)が必要。台湾版あり、3000円ぐらい。『要覧』のなかの州県レベルの歴史的地名は“モロハシ”にも載っているが、なるべく『要覧』から『紀要』までさかのぼって調べてみよう。

『中国歴史地図集』(後述)にも索引がついており、CD-ROM版は検索機能がついている。

(6) 地 図

『中国大陸省別地図』(外交時報社、1971)、『中国大地図』(京文閣人文社、1973)

『中国分省地図』(丁文江、申報館、民国25年)

『中華人民共和国地図集』(地図出版社、1974)は地図帳形式のものでは、手頃な価格。

『中華民国地図集1～5』(1959～62、国防研究院、台北)は現行のものでは最もくわしい。

The Times Atlas of China, Times Book .1974.

The National Economic Atlas of China, Hong Kong Oxford U.P. Oxford, New York . 1994.

1省1冊形式の地図帖もでていますが、地形図は含まれない。一枚ものの地図で最も地名情報が豊富なのは、『***省地図冊』は各省1冊で、大体1県を見開き2頁に配し、主要都市図も掲載している。例えば、『江西省地図冊』(江西省測絵局編制、中華地図学出版、1990)地名の掲載情報量では最大です。が、残念ながら地形図がついていない。

『近代中国都市地図集成』(柏書房、1986) 『西安市地図集』(西安地図出版社、1989) のような都市地図を集めたものもある。

Operational Navigation Chart(ONC) 1/1,000,000。F7~10、G8~10、H10~12、J11 (St. Louis , Defense Mapping Agency) は、大縮尺ではあるが地形情報の正確さでは定評がある。地図専門店で注文すれば、とりよせてくれる。ランドサット衛星が撮影したネガフィルムが市販されており、衛星写真を使った研究もすこしずつではあるが出は始めている。

(7) 歴史地図

『東洋歴史地図』(箭内互、1941、富山房) は図書館か古書店位でしかお目にかかれないもの。

『朝日タイムズ世界歴史地図』(朝日新聞社、1979)

『アジア歴史地図』(松田寿男、森鹿三編、1966、平凡社) アジア全域をカバーしている。中国だけなら、『中国史統地図集』上下冊 (地図出版社、1979、1990) は、歴史的事件、例えば農民反乱の時間的空間的推移を地図上にヴィジュアル化している。

『中国歴史・文化地理図冊』(陳正祥、1982、原書房) は、事件史以外の歴史的事項、例えば各時代の県城の位置・数や科挙合格者を地図上におとして、ドットマップ化したものなどをあつめたもの。

『中国歴史地図集』8冊 (譚其驤編、地図出版社、1982~87) は、原始社会、夏、殷、周~清など、時代別に行政区画、地名を地図上に落としたもので、信頼度、網羅性において画期的な歴史地図集。CD-ROM版も出回っていて、拡大縮小が自由でプリントO.K. 検索 (日本語版Windowsでは不可) もできる。

An Historical Atlas of China、1966、Aldine Publishing Co.(Chicago) はインド中近東方面が詳しい。戦前、日本の参謀本部や中国の諸機関で作られた大縮尺地図 (1 / 2500 ~ 50000、中国、台湾、朝鮮) がある。一部は複製出版されつつある。原本は日本では、国会図書館、東京大学総合研究資料館、京都大学人文科学研究所などの諸機関に所蔵されている。国会図書館は、『中国本土地図目録』(布目、松田編、東方書店) のような索引が必要。図書館をつうじて必要な地図名、分類番等を調べて依頼すれば、コピーして送ってくれる。

(8) 年 表

『東方年表』(藤島達朗、平楽寺書店) は所謂事件史年表ではないが、日本、中国、朝鮮の年号と西暦、回暦と対照した年表。手帳サイズのほか、大字本も出ている。

陳垣『二十史朔閏表』(1926、北京大学研究所、復刻版あり) は干支で表記された年月日を比定するのに使う。また閏月の所在も確かめられる。

『中華五千年長曆』(気象出版社、2002年) も同じ用途の書物です。使用法は講義で触れます。

『三正綜覧』(内務省地理局、1890、復刻版あり) も西暦、陰暦、回暦の対照に用いる。

(9) 漢籍目録

『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録 書名人名通検』(京都大学人文科学研究所) 『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録 書名人名索引』(東京大学東洋文化研究所、縮刷復刻、汲古書院、1981)。この種の漢籍目録は大学・図書館ごとにつくられている。立命館大学の漢籍蔵書目録も文献資料室にあるが、未収録の漢籍も多いのでカードやRunnersで調べる必要がある。

(10) 史籍解題

『東洋史料集成』(平凡社、1956) はもともと『世界歴史辞典』第23巻史料篇「東洋」として刊行されたもので、のちに単独で出版されて現在に至っている。朝鮮、中国、東南アジア、インド、中央アジア、西アジアの各地域ごとに、概説書、主要研究文献、史料について解説し、史料の幾つかについては、原文を掲載している。研究文献などの情報は古いので、他で補う必要がある。

島田虔次他編『アジア歴史研究入門』全5巻、別巻1 (同朋舎出版、1983~4) も、以下の各巻に通史、研究文献、史料解題をのせている。各巻の内容は以下の通り。

第一巻 (中国)

第二巻 (中国・朝鮮)

第三巻 (中国)

第四巻 (内陸アジア・西アジア)

第五巻 (南アジア・東南アジア・世界史とアジア) 別巻 (総索引)

山根幸夫他編『中国史研究入門』上下（山川出版社、1983）は時代ごとに、研究文献と主要史料について解説している。

近藤春雄『中国学芸大事典』（大修館書店、1978）

潘樹広編、松岡栄志編訳『中国学レファレンス事典』（凱風社、1988）

神田信夫、山根幸夫編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、1989）は中国関係史料のみについて簡単に解説をふした辞典。

小島晋治、並木頼壽編『近代中国研究案内』（岩波書店、1993）の第3部には、近代史関係の史料紹介がなされている。

（11）研究文献案内

各地域史、時代史ごとの論文や単行本などの主要研究文献については、前述の『東洋史料集成』（平凡社、1956）のほか、

島田虔次他編『アジア歴史研究入門』全5巻、別巻1（同朋舎出版、1983～4）

山根幸夫編『中国史研究入門』上下（山川出版社、1983）が基本となる。そのほか、

市古宙三、J.K.フェアバンク『中国研究文献案内』（東大出版会、1970）はもともとアメリカの中国史を専攻しようとする学生を対象に編まれた文献案内であるので、欧文文献をひろく収録している点が特徴です。ただし各文献にたいするコメントは簡単です。

『近代中国研究案内』（小島晋治、並木頼壽編、岩波書店、1993）は研究動向、研究文献、史料についてかなり詳しく解説している。

『朝鮮研究文献目録1868～1945単行書篇』（末松保和編、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、1970。同復刻、汲古書院、1980）

『朝鮮研究文献目録1868～1945論文・記事篇1』（末松保和編、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、1972。同復刻、汲古書院、1980）

『朝鮮史入門』（朝鮮史研究会編、太平出版社、1970）とか『近代中国研究入門』（東大出版会、1974）のような個別分野別の入門書も出版されている。どのような研究が行われているか、最新の情報を知りたい時に役立つのが、『史学雑誌』5月号「200＊年の歴史学会－回顧と展望－」は、前年度に発表された論文、研究書について、分野別・時代別に専門家が論評し、さらに論点の整理、研究動向の解明に及ぶこともある。また、執筆担当者によっては甚だ手厳しい批評を加えたものもあり、なかなか面白いが、一つの目安として読んだほうがよい場合もある。

『日本歴史学会の回顧と展望』（史学会編、山川出版社、1987）は1949～1985年の36年分の『史学雑誌』5月号「19＊＊年の歴史学会－回顧と展望－」を集めて復刻したもの。各巻の内容は次の通り。

中国（殷～漢）	中国（三国～唐）	中国（五代～清）	中国（近現代）
朝鮮	内陸アジア	南・東南アジア	西アジア・アフリカ

『歴史学の成果と課題』（歴史学研究会編）や『社会経済史の課題と展望』（社会経済史学会編）なども定期的に刊行されており参考すべきです。

論説資料保存会編『中国関係論説資料』（論説資料保存会、1964～）年度ごとに、中国関係の主要論文を縮刷して刊行したもので、少し見づらいことを我慢すれば、なかなか便利です。

（12）文献目録

『東洋史研究文献類目1934～1962』（東方文化学院京都研究所→京都大学人文科学研究所、1935～1962）復刻版あり。

『東洋学文献類目』（京大人文研附属東洋学文献センター、1963～）は毎年、一年遅れで前年度に刊行された雑誌掲載論文、単行本（欧文、中文、韓文をふくむ）を地域別、時代別、分野別に配列したもの。

『日本における東洋史論文目録 ～ 』4冊（東洋史研究論文編集委員会、日本学術振興会、1964～7）これら3書からは、論文のタイトルや掲載雑誌名、頁数などの情報が得られる。

『東洋史図書目録』（日外アサシエーツ、1994）は、1945～1990年の46年間に国内で発行された関係図書を網羅的に収録した文献目録。東アジア史、中国史、朝鮮史、東南アジア史、インド史など11の地域・分野に分け、さらにその下に中見出し、小見出しを立てて分類している。

『中国関係論説資料』（1964～、同保存会）は、当該年度の主要論文全文を縮印しものを分野別に編集したもの。

印刷が一部不鮮明な点を除けば、いろいろな雑誌や大学紀要を探さなくても済むという便利さはある。

G.W.Skinner ed. *Modern Chinese Society, an Analytical Bibliography* (Stanford U.P. 1973) 中文・日文・欧文篇各 1 冊 (文献資料室のものは合冊版) は清朝成立 (1644) 以降を扱った社会経済史論文・単行本を項目別に分類している。巻末の項目コードから関係文献を探索できるようになっている。

最新の情報については、毎号の『東洋史研究』の近刊叢欄の項目、『史学雑誌』巻末の文献目録の項を見よ。

また、各種データベースや国会図書館など蔵書機関のホームページにある検索機能の利用については、情報処理の授業で学んでほしい。

(13) 制度術語

『史学指南』(元・徐元瑞) 行政用語2109語に簡単な意味を付した、元朝公用語辞典。

『六部成語註解』(内藤乾吉、大安、1962) この書も清朝乾隆のころに刊行された、公用語辞典。もともと満州語学習のための満漢対訳書で、その漢訳語 (2586語) に注釈を施したものであったようだ。六部とはもちろん吏・戸・禮・兵・刑・工の6部局です。

E-tu Zen Sun、*Ch'ing Administration Terms* (Harvard U.P.)は、『六部成語註解』の英訳で、英文の解説が意外に役に立つ。

李鵬年等編著『清代六部成語詞典』(天津人民出版社、1990) は、『六部成語註解』の項目に更に詳しい解説を付したものの。行政法律辞典としては、

Philip R. Bilacia, *Dictionary of Chinese Law and Government*, Stanford U.P., 1981, pp882 が詳しい。

『中国社会経済史語彙』(星斌夫、近代中国研究センター、正統2冊) は、加藤繁ほかの主要な研究書からテクニカルタームを抽出したもので、論文や史料の解説にたいへん便利です。

『中国法制大辞典』(東川徳治、燎原、旧名『典海』) 東川は『清国行政法』や『台湾私法』の編纂に携わったスタッフで、本書は編纂の副産物である。

『律令対照定本明律国字解』(荻生徂徠著、内田智男、日原利国校訂、創文社) は行政用語の意味を調べるのに便利です。

『中国官制発達史』(和田清編、汲古書院) 『中国地方自治発達史』(和田清編、汲古書院) は、時代によって異なる歴代中国の地方行政制度を概説したものです。

—— 附録 ——

現在台湾、香港、中国などのWeb Siteに漢籍の電子テキストが公開されています。一部有料であったり、会員登録を必要とするものもありますが、多くは自由にアクセスできます。上手に利用すれば、漢籍のダウンロード、語彙検索などおおいに研究に役立ちます。代表的なSiteを下にあげておきます。ただ、これらを文字化けしないように表示するためには、あなたのパソコンの「言語設定」に「簡体字中国語」と「繁体字中国語」を加える必要があります。また、中国語で入力できるようにするには、さらにIME設定を追加しなければなりません。史料をダウンロードする場合は、直接ワープロソフト(ワードや一太郎など)に落とさず、いったんテキストスタイルで保存したあと、文章に取り込みましょう。詳しくは、パソコンをよく知っている友人か、情報処理の先生に教えてもらってください。

中華文化網 (<http://www.geocities.com/Area51/Hollow/3198/>)

このSiteは問題があって、時々見えなくなりますが、ミラーサイトが有効なことがありますから、試してみてください。『資治通鑑』や正史などの主要史料のテキストをダウンロードできるのが魅力です。ただ『宋史』と『明史』が入っていないのが残念です。

1、歴史傳記

年表

[中国歴代紀年表](#)

[中国歴代帝王年表](#)

中国歷代年號索引表

政書體通史

杜佑通典 目錄

食貨典 一至十二

選舉典 一至六

職官典 一至六 七至十四 十五至二二

禮典 一至七 八至十五 十六至二四 二五至三五

三六至四四 四五至五二 五三至六五 六六至七四

七五至八一 八二至九十 九一至一百

樂典 一至七

兵典 一至八 九至十五

刑法典 一至八

州郡典 一至七 八至十四

邊防典 一至八 九至十六

附錄

資治通鑑GB 國學 圖書在線

續資治通鑑GB 國學 圖書在線

夏商西周

古本竹書紀年輯證 上 下

春秋

國語 目錄 周語 魯語 齊語 晉語 鄭語 楚語 吳語 越語

春秋左氏傳 隱公 桓公 莊公 閔公 僖公 文公 宣公 成公

襄公 昭公 定公 哀公

春秋公羊傳 全

春秋穀梁傳 全

吳越春秋 全

越絕書 全

戰國

戰國策 目錄 周 秦 齊 楚 趙 魏 韓 燕 宋衛 中山 附錄

西漢

史記三家注 目錄

本紀 一至五 六至十二

表 一至四 五至十

書 一至八

世家 一至十 十一至二十 二一至三十

列傳 一至十 十一至二十 二一至三十 三一至四十

四一至五十 五一至六十 六一至七十

漢書 目錄

本紀 一至五 六至十二

表 一至四 五至八

志 一至三 四至六 七 八至十

列傳 一至十 十一至二十 二一至二五 二六至三十 三一至三五

三六至四五 四六至五五 五六至六十 六一至六五 六六至六八 六九、七十

前漢紀 全

漢官六種 全

東漢

後漢書 目錄

本紀 一至五 六至十

列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十
四一至五十 五一至六十 六一至七十 七一至八十
 志 一至九 十至十八 十九至三十
 後漢紀校注 一至十 十一至二十 二十一至三十
 東觀漢記校注 目錄 紀 表 志
傳一至五 六至十 十一至十五
 八家後漢書輯注 上 中 下
 三国
 三国志 目錄
 魏書 一至十 十一至二十 二十一至三十
 蜀書 一至十五
 吳書 一至十 十一至二十
 晉
 晉書 目錄
 紀 一至十
 志 一至十 十一至二十
 列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十
四一至五十 五一至六十 六一至七十
 載紀 一至十 十一至二十 二十一至三十
 九家舊晉書輯本 目錄 上 中 下
 眾家編年體晉史 全
 南北朝
 宋書 目錄
 紀 一至十
 志 一至五 六至十 十一至二十 二十一至三十
 列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十
四一至五十 五一至六十
 南齊書 目錄
 紀 一至八
 志 一至十一
 列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十
 梁書 目錄
 紀 一至六
 列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十 四一至五十
 陳書 目錄
 紀 一至六
 列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十
 魏書 目錄
 紀 一至六 七至十二
 列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十 四一至五十
五一至六十 六一至七十 七一至八十 八一至九二
 志 一至三 四至十
 北齊書 目錄
 紀 一至八
 列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四二
 周書 目錄
 帝紀 一至八
 列傳 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四二

南史 目錄

本紀 一至十

列傳 一至十 十一至二十 二一至三十 三一至四十
四一至五十 五一至六十 六一至七十

北史 目錄

本紀 一至五 六至十二

列傳 一至十 十一至二十 二一至三十 三一至四十 四一至五十
五一至六十 六一至七十 七一至八十 八一至八八

漢魏南北朝墓誌彙編 上 中 下

隋

隋書 目錄

紀 一至五

志 一至十 十一至二十 二一至三十

列傳 一至十 十一至二十 二一至三十 三一至四十 四一至五十

大唐

舊唐書 目錄

本紀 一至十三 十四至二十

志 一至十一 十二至十八 十九至二十二 二三至三十

傳 一至十 十一至二十 二一至三十 三一至四十 四一至五十
五一至六十 六一至七十 七一至八十 八一至九十 九一至一百
一百一至一百十 一百十一至一百二十 一百二十一至一百三十
一百三十一至一百四十 一百四十一至一百五十

新唐書 目錄

本紀 一至十

志 一至十四 十五至二十 二一至三三 三四至五十

表 一至九 十 十一 十二 十三 十四 十五

傳 一至十 十一至二五 二六至四十 四一至五五 五六至七十
七一至八五 八六至一百 一百一至一百十五 一百十六至一百二五
一百二六至一百三九 一百四十至一百四五 一百四六至一百五十

唐會要 目錄 一至十 十一至二十 二一至三十 三一至四十 四一至五十

五一至六十 六一至七十 七一至八十 八一至九十 九一至一百

唐律疏議 卷一至十 卷十一至二十 卷二一至三十 附錄

五代十國

舊五代史 目錄

梁書 唐書上 唐書下 晉書 漢書 周書 列傳 志

新五代史 目錄

本紀 傳上 傳下 考 世家 附錄

大宋

宋史

遼史 目錄

本紀 志上 志下 表 列傳

金史 目錄

本紀 一至九 十至十九

志 一至七 八至二一 二二至三一 三二至三九

表 一至四

列傳 一至十三 十四至二五 二六至三五 三六至四五 四六至五八
五九至七三 金國語解 附錄

大元

元史 目錄 卷一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十 四十一至五十
五十一至六十 六十一至七十 七十一至八十 八十一至九十 九十一至一百
一百一至一百十 一百十一至一百二十 一百二十一至一百三十
一百三十一至一百四十 一百四十一至一百五十 一百五十一至一百六十
一百六十一至一百七十 一百七十一至一百八十 一百八十一至一百九十
一百九十一至二百 二百一至二百十

大明

明史 目錄 本紀

大清

清史稿 本紀 卷一至五 六至十 十一至十五 十六至二十 二十一至二十五

新清史本紀 太祖、太宗、世祖 聖祖、世宗 高宗

中華民國

中華民國史事日誌 元 二 三 四 五 六 七 八 九 十
十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十
三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八

地方志

臺灣通史 目錄 一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至三七

華陽國志校補圖注 卷一、二 三至八 九至十二

2、諸子百家

儒家

四書章句集注 原文 大學 中庸 論語 孟子 附錄

孔子家語 全

荀況荀子 上 下

周易 全

尚書 虞書 夏書 商書 周書

周禮 全

儀禮 全

禮記 上 下

孝經 全

董仲舒春秋繁露 全

韓嬰韓詩外傳 全

孔鮒孔叢子 全

桓寬鹽鐵論 全

陸賈新語 全 校注

揚雄法言 義疏卷一至五 卷六至十 卷十一至十五 卷十六至二十 附錄

賈誼新書 全

劉向新序 全

劉向說苑 全

王符潛夫論箋校正 卷一至三 卷四至六 卷七至十

徐幹中論 全

荀悅申鑒 全

顏之推顏氏家訓集解 原文 卷一至三 卷四至六 卷七

大戴禮記 全

朱子語類 目錄 卷一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十
四十一至五十 五十一至六十 六十一至七十 七十一至八十 八十一至九十
九十一至一百 一百一至一百十 一百十一至一百二十

一百二一至一百三十 一百三一至一百四十

治家格言

王陽明 傳習錄

黃宗羲 明夷待訪錄

釋家

佛說四十二章經 全

弘明集 全

袁了凡了凡四訓 全

道家

老子校釋 原文 道經 德經

莊子集釋 原文 卷一、二 卷三、四 卷五、六 卷七、八 卷九、十

莊子集解 卷一至三 卷四至六 卷七、八 內篇校正

列子集釋 原文 卷一至四 五至八 附錄

太平經合校 卷一至五十 五一至一百 一百一至一百七十

文子 全

關尹子 全

通玄真經 全

葛洪抱朴子內篇校釋 卷一至十 十一至二十

黃帝四經 全

黃帝陰符經 節選

墨家

墨子閒詁 原文 卷一至五 六至九 十至十二 十三至十五 附錄

墨子城守各篇簡注 全

法家

韓非子 上 下

商君書 全

燕丹子 全

名家

尹文子 全

公孫龍子 全

鄧析子 全

劉邵人物志 全

曾國藩冰鑑 全

縱橫

鬼谷子 全

雜家

管子 上 下

管子輕重篇新詮 論 一至五 六至十 十一至十五 十六至二十

晏子春秋集釋 原文 內篇諫 內篇問 內篇雜 外篇 附錄

慎到慎子 全

呂氏春秋 紀 覽 論

淮南子 全

鶡冠子 全

王充論衡校釋 目錄 卷一至五 六至十 十一至十五

十六至二十 二一至二五 二六至三十

應劭風俗通義校注 卷一至五 六至十 佚文、附錄

洪應明菜根譚 全

小說

列女傳 全

劉歆西京雜記 全

干寶 搜神記

劉義慶世說新語 上 中 下

世說新語箋疏 上卷上 上卷下 中卷上 中卷下 下卷上 下卷下

古小說鉤沈 上 下

其他

逸周書 全

穆天子傳 全

金人銘

3、科學技藝

數學

周髀算經 全

劉徽九章算經 全

孫子算經 全

地理

山海經校注 目錄 一至五 六至十三 十四至十八

楊銓之洛陽伽藍記 目錄 卷一至三 卷四、五 附篇

農業

齊民要術校釋 目錄 卷一、二 三、四、五 六、七 八、九 十 附錄

荊楚歲時記 全

醫術

金匱要略 全

難經 全

傷寒論 全

黃帝內經 靈樞 素問

中醫檔案區

兵法

黃石公三略 全

六韜 全

尉繚子 全

司馬法 全

孫子 全

吳子 全

張擬棋經 全

4、古今散文

先秦

宋玉 對楚王問

李斯 諫逐客書

兩漢

皇帝詔 漢詔五篇

司馬遷 報任少卿書

賈誼 治安策一

晁錯 論貴粟疏

鄒陽 獄中上梁王書

司馬相如 上書諫獵

李陵 答蘇武書
路溫舒 尚德緩刑書
楊惲 報孫會宗書
劉秀 光武帝臨淄勞耿弇
馬援 誡兄子嚴敦書
鄭玄 戒子益恩書
崔瑗 座右銘
許慎 說文解字序
 三国
諸葛亮 前後出師表 誡子篇
曹丕 典論論文 與吳質書
曹植 與楊德祖書
 晉南北朝
李密 陳情表
江統 徙戎論
王羲之 蘭亭集序
陶淵明 五柳先生傳 歸去來辭 桃花源詩 桃花源記 閒情賦并序
孔稚珪 北山移文
吳均 與宋元思書
周興嗣 千字文
酈道元 水經注江水
蕭繹 採蓮賦
 唐
魏徵 諫太宗十思疏
王勃 滕王閣序
王績 自撰墓誌銘 五斗先生傳 無心子傳並序
李白 春夜宴桃李園序
李華 弔古戰場文
杜牧 阿房宮賦
駱賓王 為徐敬業討武曌檄
劉禹錫 陋室銘
韓愈 原道 原毀 獲麟解 進學解 師說 雜說一 雜說四 圻者王承福傳
 毛穎傳 諱辯 爭臣論 後十九日復上宰相書 後廿九日復上宰相書
 與于襄陽書 與陳給事書 應科目時與人書 送李愿歸盤古序 送孟東野序
 送董邵南序 送溫處士赴河陽軍序 送楊少尹序 送石處士序 張中丞傳後敘
 祭十二郎文 祭鱸魚文 柳子厚墓誌銘
柳宗元 駁復讎議 桐葉封弟辨 捕蛇者說 種樹郭橐駝傳 梓人傳
 始得西山宴遊記 鉅鉏潭西小丘記 至小丘西小石潭記 袁家渴記
 小石城山記 罷說 黔之驢
白居易 琵琶行并序 與元微之書 凌霄花 秦吉了
皮日休 孔子廟碑
 宋
范仲淹 岳陽樓記
歐陽修 縱囚論 五代史記一行傳敘 送徐無黨南歸序 醉翁亭記
 相州畫錦堂記 秋聲賦 祭石曼卿文 瀧岡阡表
王安石 答司馬諫議書 讀孟嘗君傳 遊褒禪山記
蘇洵 六國論 辨姦論 心術 送石昌言使北引
蘇軾 范增論 刑賞忠厚之至論 留侯論 賈誼論 晁錯論 教戰守策 上梅直講書

喜雨亭記 凌虛臺記 超然臺記 放鶴亭記 石鐘山記 潮州韓文公廟碑 赤壁賦
乞校正陸贄奏議進御劄子 三塊堂銘 方山子傳 記承天寺夜遊 表忠觀碑
蘇轍 六國論 上樞密韓太尉書
曾鞏 贈黎安二生序 戰國策目錄序
司馬光 訓儉示康 諫院題名記 魯仲連義不帝秦
周敦頤 愛蓮說
張載 西銘
錢公輔 義田記
朱熹 白鹿洞書院學規
文天祥 正氣歌並序
元好問 送秦中諸人引
沈括 夢溪筆談
呂蒙正
元
虞集 尚志齋說
明
劉基 司馬季主論卜 賣柑者言 尚節亭記
方孝孺 深慮論
王守仁 瘞旅文 教條示龍場諸生
宗臣 報劉一丈書
歸有光 滄浪亭記 項脊軒志 先妣事略 寒花葬誌
王世貞 蘭相如完璧歸趙論
袁宏道 徐文長傳 西湖雜記 敘陳正甫會心集
張溥 五人墓碑記
李贄 高潔說 童心說 雜說
徐渭 借竹樓記
張岱 湖心亭看雪 西湖七月半 柳敬亭說書 墓誌銘 西湖夢尋自序 明聖二湖
陳皋謨 凶人
陶望齡 與袁石浦 養蘭說
湯顯祖 短簫
史可法 復多爾袞書
清
王永彬 圍爐夜話
民國
孫文 國父遺囑
梁啟超 新民說
林覺民 與妻訣別書
方聲洞 赴義前稟父書
朱自清 背影
龔鵬程 國史鏡原序 不拘一格見人才
劉墉 談文化自尊
張作錦 中國人為什麼不能要回來
良樹 書癡自嘲詩
其他
百家姓
三字經
增廣賢文
笑話選集

蘇氏蕙若蘭織錦迴文璇璣圖

網友賜稿

JamesK.Lewy 養生記逍 摩訶般若波羅蜜多心經

戴庭輝 袁督師遺集、遺詩

韓退之 唐李問對

5、古詩詞曲

楚辭

原文 卷一至八 卷九至十七

毛詩

國風 小雅 大雅 周頌 魯頌 商頌

古詩 樂府詩

樂府詩集 目錄 卷一至十 十一至二十 二十一至三十 三十一至四十 四十一至五十

五十一至六十 六十一至七十 七十一至八十 八十一至九十 九十一至一百

古詩十九首 孔雀東南飛 木蘭詩 蘇武與李陵詩

上邪 佳人歌 新寒 迢迢牽牛星

魏晉南北朝詩

魏 曹魏父子詩選 三曹詩選 曹操詩全集 建安七子

晉 傅玄 張華 陸機 潘岳 左思 張協 王讚

劉琨 郭璞 陶淵明 吳隱之 支遁

宋 顏延之 謝靈運 鮑照 謝莊 陸凱

齊 謝朓 王融 孔稚珪

梁 武帝蕭衍 沈約 范雲 柳惲 吳均 何遜 陶弘景 庾肩吾 王籍 朱超道

陳 陰鏗 徐陵

北朝 劉昶 蕭慤 顏之推 王褒 庾信 無名氏

隋 江總 楊素 薛道衡 虞世基

唐宋明清詩

唐 陳子昂 崔顥 李白 王維 白居易 李商隱 杜審言 李賀 薛濤 曹松

宋 元好問

明清 唐寅 龔自珍 鄭板橋 曹雪芹

唐宋詞

唐 溫庭筠

五代 李煜

宋 柳永 晏殊 歐陽修 晏幾道 蘇軾 秦觀 周邦彥

李清照 陸游 辛棄疾 姜夔 朱淑真 朱敦儒

清詞

納蘭性德

顧貞觀

詩詞集

唐詩三百首中英對照

全唐詩GB

宋詩百首

千家詩

唐宋名家詞選

白香詞譜

元曲

元人小令選

無名氏

其他

李蕙章 椒紅軒詩稿

6、精彩小說

古典名著

三国演义（我的最愛）

紅樓夢

水滸傳

西遊記

封神榜

台灣中央研究院漢籍電子文獻 (<http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>)

標点本の正史の全文検索が便利です。

資料庫名稱	製作單位	字數	備註
二十五史	史語所 漢籍全文資料庫計畫	39,965,726	說明
十三經		8,600,316	
小說戲曲暨其他		3,375,420	
漢籍全文資料庫		230,938,180	付費使用 分類說明
大正新脩大藏經		10,118,213	付費使用
上古漢語語料庫-摘要	語言所文獻語料庫研究室 資訊所詞庫小組及 史語所漢籍全文資料庫計畫	830,985	
臺灣方志	臺史所史籍自動化室	7,537,840	
臺灣檔案		7,100,885	
臺灣文獻（一）		5,923,598	
臺灣文獻（二）		4,016,677	
臺灣文獻（三）		4,574,620	
臺灣文獻（四）		6,945,617	
臺灣文獻（五）		3,367,510	
文心雕龍	資訊所文獻處理研究室	1,700,011	檢索 30 筆 （「清代經世文編」 包含四個資料庫）
佛經三論		104,257	
清代經世文編	近史所	7,976,623	
中華民國史事日誌		1,452,451	
新民說		119,728	
姚際恒著作集	文哲所資料提供 計算中心資料庫建立	951,560	
詞話集成	文哲所資料提供 史語所漢籍小組資料庫建立	95,347	
新清史-本紀	國史館清史組	878,629	
樂府詩集	師大國文系製 計算中心技術協助	633,146	
閩南語俗曲唱本「歌仔冊」	王順隆教授製 計算中心技術協助	2,366,353	由此連入
人文資料庫師生版1.1	中央研究院 內容摘自上列資料庫	47,105,213	

寒泉 (<http://210.69.170.100/s25/index.htm>)

十三經、先秦諸子、全唐詩、宋元學案、明儒學案、四庫總目、朱子語類、紅樓夢、白沙全集、資治通鑑、續資治通鑑、

中華電子佛典協會 (<http://ccbs.ntu.edu.tw/DBLM/cindex.htm>)

「大正新脩大藏經」（日本大藏出版株式會社）第一卷至第八十五卷為底本

8 卒業論文の栞

東洋史学専攻「卒業論文」の体裁について

原稿用紙に手書きする場合	B 4 判「立命館大学論文用紙」(横長にして二つ折り)
縦書・横書の指定	縦書
枚数	30枚以上50枚以下
その他の注意	黒または青のペンを使用すること。
パソコンを使う場合	B 5 判白紙(縦長)
縦書・横書の指定	縦書
文字数に関する指定	1行あたりの文字数: 40字 1頁あたりの行数: 10行
枚数等に関する指定	30枚以上50枚以下
その他の注意	本文は12ポイント文字で作成
表紙等に関する体裁	フラットファイル(色指定なし)
大きさ	B 5
綴じ辺	長辺綴じ(右辺綴じ)
題目シール	題目シールは不要

1、テーマの選び方

卒業論文を作成するに当たって、まず最初に念頭におかなければならないのは、論文の対象、つまりテーマの選択である。勿論、東洋史の論文であるから、東洋史学に関するものであれば、何でもよいわけである。しかし、卒業論文は一般の研究論文とは異なり、大多数の人には初めての経験であり、しかも限られた期間、限られた枚数という制約があるから、余り大きな対象やテーマを選ぶのは不适当である。又、東洋史も歴史学という実証を旨とする科学の一分野であるから、その根拠となる史料の存否・多少、その解読の難易等によっても、自らそのテーマを選ぶ範囲が限定されてくる。そのほか、実際上の問題として、分野によっては本学に史料参考文献等のない場合もあるから、予め本学にどのような分野の書籍があるかを調べておく必要がある。勿論、本学にない場合、京大その他の研究機関にあれば、担当教員の紹介で閲覧することも出来る。しかし、貸出は不可能であり、そのほか何かにつけて本学の書物を使用する場合と比較して不便である。

又、学会専門誌等の動向にも留意して、現在どのような点に問題があるのか、あるいは盲点や未開拓の分野などを知る必要があるが、未開拓の分野を選ぶ場合は、特にその史料の有無に気をつけ、テーマ倒れとならないように留意すべきである。又現在活動中の人物等については、その史料となるべき著作に対する批判も未だ不十分であり、したがってその人物および業績等の歴史的評価が困難であるから、客観的な研究対象とはなりにくいであろう。

テーマというものは大体大雑把な構想を立て、その下に史料を集め、文献を読んで一応の骨組が出来上がってからは、はっきりつけられるものであり、最初からテーマを決めて、その枠の中にはめていこうとするやり方は無理があるようである。そういう点から大体の構想だけを描くこととして、その計画に従って骨組を作り、題目提出日迄にはっきりしたテーマを決められるようにすればよい。

2、研究方法

演習等の講義に於いて既に教授されたことと思うが、不明な人は「史学研究法」に関する著作を読むこと。詳しくは指導教授、並びに他の教員に聞いてほしい。

3、研究文献

東洋史の研究を発表した著書・論文の目録としては、幸いにも京大人文学研究所から「東洋史(のち東洋学)研究文献類目」が昭和9年以降毎年発行されており、これによって関係文献を探し求められるから重宝である。古い所は大塚史学会編の「東洋史論文要目」・史学会の「史学雑誌総索引」等を見れば明らかである。特別なものを除いては、だいたい昭和以降の文献のみ参照すれば充分であろう。山根幸夫編『中国史研究入門上・下』(山川出版社、1983年)、『アジア歴史研究入門』(同朋舎、昭和58年～9年)―第一巻(中国) 第二巻(中国・朝鮮) 第

三巻（中国）第四巻（内陸アジア・西アジア）第五巻（南アジア・東南アジア・世界史とアジア）—は、共に時代別、分野別に、研究の現状と問題点、工具類、研究文献の紹介、史料解題等を詳説しており、テーマの設定など卒論の初期の段階で先ず読んでおくべきものである。同上書の中でも紹介されているが、時代別・地域別のものとしては、東洋文庫編の「宋代研究文献目録」（昭和32年刊）・「明代史研究文献目録」（昭和35年刊、これは清水先生追悼明代史論叢にも所収）・京大人文研の「蒙古研究文献目録1900～1962」・袁・渡辺編「新疆研究文献目録1886～1962」等がある。又雑誌（紀要、記念論文集、講座を含む）ごとに順次関連題目を列挙したものには、東大東洋史研究室編の「日本における東洋史論文目録 ～ 」がある。最近出た『東洋史図書目録』（日外アソシエーツ、1994）小島晋治・並木頼寿編『近代中国研究案内』（岩波書店、1993）も役立つ。

他方、中国側からは中国科学院編「中国史学論文索引上・下」（1957年刊）・章郡編「民国學術論文索引」（民国43年刊）・余秉權編「中国史学論文引得1902～62」・科学院歴史研究所編「史記研究的資料和論文索引」（1957年刊）等が発行されている。

次に諸論文の内容については、「史学雑誌」（毎年5月号）が毎年（1～12月）の学界展望を掲載、主要論著の紹介をしているのをはじめ、歴史学研究会の「歴史学の成果と課題」・一橋大学新聞部編「経済学研究の栞 —東洋経済史篇—」（昭和25年刊）・社会経済史学会編「戦後に於ける社会経済史学の発達」（昭和35年刊）・「日本における歴史学の発達と現状 ～ （東大出版会）等に各々紹介されているから参照すれば同時に学界の動向もうかがうことが出来よう。G. W. Skinner編、Modern Chinese Society An Analytical Bibliography (Stanford U. P.1973) —欧文文献篇、中文文献篇、日文文献篇—は、1644～1972年の中国の政治・社会・経済関係の文献目録で、詳細な項目索引が役立つ。なお、論文要旨を収載したものでは「宋代研究文献提要」（昭和36年東洋文庫刊）・Japanese Studies of Modern China (Harvard-Yenching 1955) ・Revue Bibliographique De Sinologie (1955～) 等がある。

なお、東洋学の専門誌以外に掲載された文献を原載のまま複写収録したものに「中国関係論説資料」（1964年以降）がある。

史料の目録解題の類には古くは那珂通世の「東洋史学要書目録」（遺書所収）鈴木俊他編の「史籍解題」（昭和11年・平凡社刊）等があり、戦後のものでは「東洋史史料集成」（昭和31年・平凡社）これは雑誌の研究論文をも含み便利である。これらの他「アジア歴史事典」の該項目の個所に参考史料や文献も附記されているから参考にするとい。近刊の「中国史籍解題辞典」（燎原書店、1989年）も役に立つ。

ところで、以上挙げたものは何れも数年以前までに発表された論文しか収載されていないから、最近のものについては「東洋史研究」の「近刊叢欄」や、「史学雑誌」の「史学文献目録・東洋史」を参照したり、文献資料室にある文献を見て確認しておくことを忘れてはならない。

4、論文の形式

卒業論文の体裁、即ち学術論文の叙述の形式とは如何なるものであるかと云うことは、一言で表し難い。各自が学術雑誌に掲載されている論文をよく読んで、その要領を会得するのが最も手近な方法である。従ってこれの詳細に関しては、論文作成の過程で当面する関係文献閲覧の際に承知をしてもらうことにして、ここでは大まかな点についてのみ述べることにする。

《序言》

序言では、（1）自分がこのテーマを選んだ理由、すなわち何故この論文を書くに至ったのか、（2）この分野では今日まで誰がどのような研究をしているのか、すなわち研究の現状、（3）この論文がどのような構成で書かれるのか、すなわちそのアウトラインなどを述べる。なお、（2）は（1）ともかかわるもので、今日までの諸研究に対して自分がどのような見解、あるいは疑問等をもったのかによって、その主題が導き出されることもある。また序言では主観的見通しを書くことも許される。

《本論》

自分のテーマを論考・論証する場である。章あるいは節をたてて、小題を付し、その章あるいは節では何を述べるのか、予めわかるようにする。その方が自分にとってもまとまりがつけ易い。しかし、どうしても小題をつけ難い時には、一・二の番号だけでもよい。

《結語》（結論）

序言に於いて述べられたこの研究の抱負・目的に対する回答の場である。普通、本論中に於いて客観的な立場から述べて来たところを、いま一度簡単に要約し、そこから何が得られたか、従来の研究に対して如何なる点が異なるのか、また新知識なのか、などを明らかにする。本章は簡にして要を得たものであることを望む。

《註》

註は、本文に論ずる所をより明確にするため、また所論とは直接関係せず本文中には入れ難いが、どうしても記しておきたいことなどに用いる。卒論には脚註と巻末註との場があり、必要によって使い分ける。（普通の論文には脚註はないが、卒論の指定用紙には下に空欄があり、これが出来るようになっている）

（1）脚註は短文のものに限る。たとえば、

- ・中国等の度量衡を我国の度量衡になおして示す。
- ・当時（歴史的）の地名が現在の何処に当たるかを示す。
- ・引用文、引用文献、引用史料等の出拠を示すための書名、巻数、条項、頁数など。

- ・その他、あまり一般的でない言葉や概念を説明する場合。
- これらのうち、度量衡や地名に関しては、本文中に（ ）で入れてよい。
- (2) 巻末註は長文に互るものである。たとえば、
- ・間接的なものであるが、述べておきたいこと。
 - ・他説に対する批判や、それに関する自分の考えなどを参考上記す。
 - ・文章では繁雑でわかりにくいものを図表や統計表などで示したいもの。
 - ・史料を日本語に訳して本文に出した場合の原文など。勿論、これらも極めて短文ですむ場合は、脚註に入れてよい。
- (3) 註をほどこす場合、その註番号を付するが、それが語や句に対するものである場合は、註番号はその語句の末尾の右側に付す。また論説や引用文に対するものである場合は、その文章の末尾右側に付す。なお、脚註と巻末註との番号は分けて示す必要があり、たとえば、脚註は …、巻末註は [一][二]…などとする。表記方法はいずれでもかまわないが、読者にわかりやすいようにする。また、一般の論文では註を章節の終わりごとに付ける場合もあるが、卒論では枚数も限られていることであるから、一括して巻末に付ける(巻末註の場合)。
- (4) 孫引(史料や論説を、他の論文に引かれているものから引き写すこと)はすべきでないが、もしどうしても原のものに当たることができなかった場合(たとえば特定の研究機関や文庫にしかなく、閲覧が不可能であった場合) 誰の書物・論文から引用したかを明記し、孫引であることを断っておくべきである。

《その他》

- (1) 参考文献・史料の一覧目録。これは必ず付すべきもので、自分が実際に使用したものを、雑誌所載論文は、著者・論文名・誌名・号数・発行年、著書は、著者・書名・発行所・発行年、史料は、著者・書名・刊本名、の順で明記し、巻末註の後に付ける。
- (2) 地図・年表・その他の図表等。
右の(1)は必ず巻末註の後に附する。(2)は必要に応じて附録とする。
- (3) 論文の枚数。提出論文は手書きの場合、本文400字詰原稿用紙30枚から50枚(60頁～100頁)までとし、註及び目録・附録類はこの数に含まない。
- (4) パソコン使用の場合は、用紙は無地、白、B5縦書、本文は12ポイント、1頁行数10行、1行字数40字とし、30頁以上、50頁以内とし、その他は、原稿用紙使用の場合に準じる。

5、原稿用紙に記載する際の注意事項(書き方)

- (1) 原稿用紙は必ず立命館大学論文用紙B4400字詰めを2つ折りにし使用すること。
- (2) インクは黒を使用すること。
- (3) 字は楷書。癖字は直すこと。
- (4) 漢字は旧・当用の何れでもよいが、漢文史料は旧漢字を用いること。
- (5) 仮名遣いは現代・歴史的の何れでもよいが、どちらかに統一すること。
- (6) 句読点は行の一番上に来てもかまわない。(句読点を行の一番下のマス外に打ってもよい。このとき、次行の一番上を1マスあける人があるが、これはいけない。)
- (7) 改行した時(段落のかわり目)は、一番上を1マスあけて(1段下げて)書きはじめる。用紙の変わるごとに1マスあける人があるが、これはいけない。
- (8) 引用文について
- ・短い引用文は「 」をつけて本文中に入れてしまう。この場合「 」はそれぞれ1マスとする。
 - ・長い引用文は行を改め、全体を本文中より2マス下げて(2段下げて)書く。この場合は「 」はつけない。
 - ・漢文史料を引用する場合は、必ず句読点・返り点・送り仮名をつけるか、書き下し文にする。書き下し文、或は訳した文の場合は、必ず原文を註に入れる。
- (9) ページ数は、各頁毎に必ず打つ。用紙の枚数ではないことに注意。
- (10) 字の訂正、わかりやすくなっていたなら何れの方法でも差し支えない。上から紙を貼っても、脇に書き直してもよい。
- (11) 清書の際に誤写することが多いから、提出する前にもう一度読みなおしていただくこと。特に史料の誤写は意味が通じなくなるから、清書後に原典と照合することが大切である。
- (12) 装幀。表紙はB5のフラットファイル(横とじ)(論文用紙と共に生協で頒布している)を用いること。
表紙の次ぎには原稿用紙を1枚入れて扉をつくり、表紙・扉とともに、右肩に何年度卒業論文、中央に論文題目、左に学科、専攻、学生番号、氏名等を書く。この場合、表紙は墨書、扉はペン書とする。
- (13) 目次、扉の裏には目次を付す。序言・章節及び小題、結語と、それぞれの頁数を記す。本文は新たな用紙からはじめ、頁数も本文から打ちはじめ。

6、論文題目及び論文の提出

- (1) 論文題目は、10月6日(木)午後5時までに、文学部事務室に提出すること。この論文題目が期日までに提出されていないと、論文が不受理となるから注意。
- (2) 論文は、12月20日(火)午後5時までに、文学部事務室に2部提出する。期日時間に遅れたり、規定枚数に満たぬもの超過したものは、不受理となるからくれぐれも気をつけてほしい。特にパソコンによる作成の場合、機器やプリンター等のトラブルによって提出できないなどは一切理由にならないので、余裕を持って完成印字すること。

以上、数項目に互って卒業論文作成上、気をつけるべき点を述べて来たが、なお不明の点があれば指導教員に尋ねてほしい。尚、論文は内容が重要であるのは勿論であるが、その内容を明確鮮明にするのは構成叙述であるから、清書・提出に至るまでに、少なくとも一度は指導教員に見てもらって、内容叙述ともに優れた卒業論文となるように努力されんことを願う。

「卒業論文」の提出について

「2005年度卒業論文」の提出締切期限は、
12月20日(火)午後5時とします。＜時間厳守＞

提出の際は、学生証が必要です。

必ず本人が持参してください。事前許可なしで代理提出はできません。

締切時間は厳守してください。遅延提出は一切認められません。

卒業論文の提出の形式が整っていないと受理できないケースもありますので、万端に準備してください。

単なる体調不良や交通機関の延着・機器等の故障・勤務の都合等の理由での提出遅延は、認められません。余裕を持って提出できるように心がけてください。

予測不可能かつ緊急の事態などで、どうしても締め切り前の提出が困難になった場合、**自分で判断せず、必ず事前に文学部事務室に一報**してください。事前連絡・相談があったケースに関してのみ、本人申請書・証明書類を提出の上、教授会の審議を受けた上で提出の延期を許可する場合があります。(全てが許可されるとは限りません。)事前連絡と必要な書類手続の両方が満たされていることが大前提です。事前の連絡がない場合は、事後の対応が不可能になります。

「卒業論文」の提出前に、「**卒業論文題目届**」を文学部事務室に提出することが必要です。「卒業論文題目届」の提出締め切り期限は、

10月6日(木)午後5時とします。

論文審査の主査・副査の発表は、10月下旬から11月上旬とします。各専攻・プログラム共同研究室掲示板に掲示します。

口頭試問の日程は、1月下旬から2月中旬に行います。個人別の日時は、1月中旬頃に各専攻・プログラム共同研究室掲示板に掲示します。

卒業旅行の日程は、口頭試問を避けてください。

卒業論文の形式は、各専攻・プログラムにより異なりますが、以下の形式は共通ですので、必ず守ってください。

卒業論文は、添付資料なども含め、必ず**2部**提出してください。

表紙に論題、氏名、学生証番号などを記載してください。

論題は、事務室に提出した「卒業論文題目届」と全く同一でなければなりません。卒業論文作成中に論題の変更が必要となれば、主査・副査の変更がないか必ず指導教員に確認した上で、事務室で論題変更の手続きを行ってください。テーマ自体が変わるなど、大きな変更は認められません。

主査・副査の名前を記した紙（シールになっています）を、おもて表紙の裏側に貼り付けてください（２部とも）。「主査・副査シール」は文学部事務室で配付しています。主査・副査は10月下旬から11月上旬に共同研究室の掲示板に掲示されていますので、早めに確認してください。

体裁については各専攻の「教学の手引き」に従って作成してください。（専攻によっては体裁の変更指示もあるため、各専攻掲示を確認してください。）

体裁については、各専攻で点検します。したがって、窓口・提出会場で受け付けられた論文でも、専攻で体裁上の不備が発見された場合は、口頭試問の時点でF評価となることがありますので、注意してください。

2005年度後期 卒業論文に関する日程

日 程	内 容
10月6日(木) 午後5時まで	「卒業論文題目届」事務室提出締め切り
10月下旬～11月上旬	主査・副査発表(共同研究室掲示板)
11月28日(月)～12月5日(月)	題目変更期間
12月13日(火)	卒業論文受付開始
12月20日(火) 午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
1月中旬頃	口頭試問日程発表(共同研究室掲示板)
1月下旬～2月中旬	口頭試問実施

5 回生以上の学生で、前期に卒業論文を提出する方の日程

日 程	内 容
4月28日(木)午後5時まで	「卒業論文題目届」事務室提出締め切り
7月1日(金)～7月8日(金)	題目変更期間
7月13日(水)	卒業論文受付開始
7月20日(水)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
7月下旬～8月	口頭試問はこの間に実施します。日程は7月下旬に各専攻・プログラムの共同研究室掲示板に掲示します。

テーマリサーチ型ゼミナールで卒業論文（非卒業論文形式含む）を提出するには

テーマリサーチ型ゼミナール受講学生の皆さんは、従来のような卒業論文提出の形態（卒論形式）もあり得ますが、クラスによっては、そこで制作する卒業論文は従来の専攻のような論文形態によらず、共同で成果物（本の出版等）を仕上げてこれを卒業論文とすることができるという形態（非卒論形式）も認められています。提出期日・提出先・提出方法については、卒論形式か非卒論形式かによって取り扱いが異なります。必ずクラス内で担当教員に、いずれの形式なのかを確認してから作成してください。 卒論形式・非卒論形式いずれの場合も「卒業論文・卒業制作テーマ届」（←卒論形式・非卒論形式共通）は全員提出してください。

「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り：10月6日（木）午後5時まで

テーマ届変更期間：11月28日（月）～12月5日（月）

体裁について

卒論形式で制作の場合	文書体裁	字数・書式・用紙の大きさなどはクラス担当者の指示に従うこと
	表紙等に関する体裁	題目、学生証番号、氏名を必ず記載すること
	その他注意	1. 学生本人のみの執筆による単著であること。共同執筆の類は該当しない。 2. 主査・副査の発表・口頭試問日程等は担当者の指示に従ってください 3. 提出締め切り等の詳細は「テーマリサーチ型ゼミナール・卒論形式で提出する方」を参照してください。
非卒論形式で制作の場合	文書・表紙体裁	体裁については全てクラス担当者の指示に従うこと
	その他注意	1. 制作物（成果物）の提出が不要の場合であっても卒業論文・卒業制作テーマ届を所定の期日までに文学部事務室へ提出してください。 2. 制作物（成果物）の提出が必要な場合、提出期日・提出先・提出方法などは担当教員の指示に従ってください。 3. 口頭試問に相当するものとして、「卒業制作発表会（仮）」を実施することがあります。実施日については、担当教員の指示に従ってください。

テーマリサーチ型ゼミナール「卒論形式」で提出をされる方の提出について

提出に際する諸注意は基本的に前述の「卒業論文」の提出についてに従ってください。ただし、以下点が異なりますので留意してください。

TRSのばあい、「卒業論文題目届」ではなく、「卒業論文・卒業制作テーマ届」の提出が必要です。

論文審査の主査・副査の発表日程は授業内にて指示します。

口頭試問の日程は基本的に1月下旬～2月中旬に行う予定ですが、個人別の日時等は授業内にてお知らせします。クラス担当教員の指示に従ってください。文学部共同研究室掲示板に掲示することもあります。

日 程	内 容
10月6日(木)午後5時まで	「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り
10月下旬～11月上旬	主査・副査発表(担当教員による指示)
11月28日(月)～12月5日(月)	題目変更期間
12月13日(火)	卒業論文受付開始
12月20日(火)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
1月中旬頃	口頭試問日程発表(担当教員による指示)
1月下旬～2月中旬	口頭試問実施

5回生以上の学生で、前期に卒業論文を提出する方の日程

日 程	内 容
4月28日(木)午後5時まで	「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り
7月1日(金)～7月8日(金)	題目変更期間
7月13日(水)	卒業論文受付開始
7月20日(水)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
7月下旬～8月	口頭試問はこの間に実施します。日程は各担当教員に確認してください。



履修方法とユニットプログラム、 履修モデル

1 科目一覧

東洋史学専攻 1 ～ 8 回生

	1 回生	2 回生	3 回生	4 回生
概 説	東洋史概説 ・ (各 2)	東洋史概説 ～ (各 2)		
講 読	* 漢文史籍読解(4): 通年	* # 東洋史講読演習 (4): 通年		
特殊講義など		東洋史学史(2)	# 東洋史特殊講義 ～ (各 2)	
小 集 団	* 東洋史研究入門(4): 通年	* 東洋史基礎講読(4): 通年	東洋史講読演習 (4): 通年	東洋史演習(4): 通年 * 卒業論文(4): 通年

1. 科目名のカッコ内数字は単位数を示します。
2. * のついた科目は、東洋史学専攻の学生のみが受講できます。
3. # のついた科目は、重複受講ができます。
4. 下線のついた科目は、その回生でしか受講できません。

2 履修の方法

必修科目 (卒業するために必ず単位を取得しなければならない科目)

	東洋史講読演習 (2 回生以上)	2 科目 8 単位必修 (2 ・ 3 回生で各 4 単位)
	東洋史演習 (4 回生以上) ゼミナール (テーマリサーチ) (4 回生)	4 単位選択必修
	卒業論文 (4 回生以上)	4 単位必修

* 6 回生以上は選択不可

登録必修科目 (必ず登録・受講しなければならない科目)

	漢文史籍読解 (1 回生のみ)	4 単位
	東洋史研究入門 (1 回生のみ)	4 単位
	東洋史基礎講読 (2 回生のみ)	4 単位
	東洋史講読演習 (3 回生のみ) ゼミナール (テーマリサーチ) (3 回生のみ)	1 科目 4 単位選択

専攻科目以外の登録必修科目

- ・ リテラシー入門 (教養科目 : 4 単位) 1 回生通年
- ・ 史学概論 ・ (人文科学総合講座 : 各 2 単位) 1 回生前・後期
- ・ 外国文化講読 (中国語) (人文科学総合講座 : 4 単位) 3 回生通年

1 ～ 5 回生の社会人学生の皆さんは、 以外の必修科目、および登録必修科目はありません。ただし、条件の許す限り、上記の必修・登録必修科目は履修してください。
6 回生以上の社会人学生の皆さんの必修科目・登録必修科目は、一般学生と同様です。

3 受講登録上の注意

1 回 生

1. 下記の科目は、クラス指定を行っています。クラスは掲示にて発表します。指定されたクラスを本登録してください。

東洋史研究入門、漢文史籍読解、リテラシー入門、外国語科目（第1・第2）

2. その他、1回生配当の登録必修科目を忘れずに登録してください。

2 回 生

1. 下記の科目は、クラス指定を行っています。指定されたクラスを本登録してください。

初修外国語・応用 第1外国語として初修外国語を選択したみなさんが履修します。クラスは掲示にて発表します。

東洋史基礎講読 クラスは掲示にて発表します。

2. 下記の科目は予備登録科目です。指定された日に予備登録してください（「履修要項」を参照）。予備登録の結果決定したクラスを必ず本登録してください。

東洋史講読演習

3 回 生

1. 下記の科目は予備登録科目です。指定された日に予備登録を行ってください（「履修要項」を参照）。予備登録の結果決定したクラスを本登録してください。

東洋史講読演習、ゼミナール（テーマリサーチ）* すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを本登録してください。

外国文化講読（中国語）

東洋史講読演習

4・5回生、昼6～8回生

1. 下記の科目は、本年度の登録で卒業見込みがでる方のみが受講できます。決定したクラスを本登録してください。

東洋史演習、ゼミナール（テーマリサーチ）* すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを本登録してください。

卒業論文 卒論ゼミと同一のクラスを登録してください。

* テーマリサーチ型ゼミナールは2001年度以降入学者のみが受講できます。

2. 下記の科目は、本年度の登録で資格取得の見込みがでる方のみが受講できます。授業コードを必ず受講登録のCR用紙に記入し、本登録してください。

(教)教育実習 4回生は総合演習と同一のクラスを登録してください。7回生以上は、文学部事務室へ個別相談に来てください。

(芸)博物館実習

4 ユニットプログラム

文学部では2004年度より、皆さんの学び方の指針として、ユニットプログラムという考え方を提示することとしました。ユニットプログラムとは、**皆さんの所属する専攻・プログラムの特色を活かした将来像を念頭においたうえでの学び方・大学生活の過ごし方の指針**です。具体的には、専攻・プログラム毎に以下のような3つのユニットを提示します。

総合教養形成型ユニット

所属する専攻・プログラムの教学を中心としつつも、文学部の幅広い学問分野を広く修め、それを活かしてどのような将来像を描けるか、を提示します。

専門職養成型ユニット

所属する専攻・プログラムの特色を活かした専門的力量や技能などを形成し、それを活かしてどのような将来像を描けるか、を提示します。

研究職養成型ユニット

所属する専攻・プログラムの教学を深く修め、将来、(大学教員などの)研究職を目指す方策を提示します。

また、文学部には10専攻3プログラムがありますので、専攻・プログラムの特性に応じた内容となっています。

そして、これはよく覚えておいて頂きたいのですが、**必ずしもこのユニットの想定する将来像だけが全てではない**、ということです。極端な話をすれば、文学部を卒業して、ロースクールに入って、弁護士になる事だってありえる選択肢なのです(実際、司法試験に合格した文学部卒業生は過去にいますし、2004年度より設置されたロースクールは、法学部卒業生以外も広く門戸を広げています)。皆さんの意欲次第では、どのような道も開けるでしょう。

では、なぜこのようなユニットプログラムを提示するかという趣旨は、皆さんが**皆さん自身の将来像をよく考えて、それに向かって有意義な(学問やそれ以外も含めた)学生生活を送れるようにしていただきたい**からなのです。目指す将来像が明らかになれば、それに向けた学生生活も充実することでしょう。

もちろん大学生活を送っていく中で目指したい将来像が変わることはありえますし、それは全く問題ありません。したがって、**ユニットプログラムは一つを選択すると一つのユニットに所属するといったものではありません**。

今まで申し上げましたように、ここに提示するユニットはあくまでも例示です。これらを参考にして、皆さんが将来を考える一助になるよう願っております。

なお、「ユニットプログラム」は、本専攻を通じて身につく素養や経験を踏まえた卒業後などの想定されるキャリア形成とそのための学生生活の指針であり、「履修モデル」は、卒業論文で取り扱う研究テーマをタイプ別に分類し、その分野で推奨する履修科目を挙げたものです。それぞれの目的は異なっており、混同しないように留意してください。

1、総合教養形成型プログラム (Asian Study Program)

【学生像と進路】

必ずしも東アジア史だけでなく、広くアジア各地域の文化・社会、それらの相互交渉などの分野に興味を抱いている学生を想定している。進路としては、一般企業のほか、東洋史分野以外の大学院進学も想定される。

【履修科目】

語学、中国語は深く正確な理解よりも、会話作文を中心とした運用能力に重点をおいた学習が求められる。副専攻の履修や短期/長期の語学留学が望ましい。

専攻専門科目以外の、日文、中文、インス、地理学で開設されているアジア関係科目を幅広く履修することにより、アジアに関する該博な知識と総合的な判断力の養成をめざす。在来卒論ゼミだけではなく、サブメジャー、テーマリサーチゼミの履修も視野に入れる。新設の特講「東洋学のための情報処理学」は氾濫する情報の中から必要な情報を抽出し、適切に利用するために大いに役立つ。

2、専門職養成型プログラム (Asian History Program)

【学生像と進路】

4年間の東アジア史研究を通してつちかった情報の収集・処理と課題解決能力をもって社会の各分野において活躍できる学生をそだてる。進路としては中高の地歴教員、マスコミ、公務員、一般企業が想定できる。

【履修科目】

語学、中国語は深く正確な理解よりも、会話作文を中心とした運用能力に重点をおいた学習が求められる。副専攻の履修や短期／長期の語学留学が望ましい。中検準2級を目標に学習。

専門科目、史学概論や東洋史学史その他東洋史学の専門科目のほか、日本史学、西洋史学関係の科目も積極的に履修し、歴史学全般についての幅広い知識と歴史学の手法を身につける。特講「東洋学のための情報処理学」は、効率的な資料収集とその批判的活用に不可欠である。

公務員、マスコミ希望者についてはエクステンションの受講が望ましい。教職、学芸員、司書などの資格取得を目指す。

3、研究職養成型プログラム (Advanced Program)

【学生像と進路】

本学および他大学院へ進学し、東洋史学分野の研究を進め、後期課程に進学し学位取得後、研究職につくことを希望しているもの。修了後の職種としては、大学、高専、研究所等の研究職、博物館学芸員などの分野への就職を想定できる。また、大学院は後期課程に進学せず前期課程のみで修了し、研究職以外の分野への就職を希望するもの。修了後の職種としては公私立高校教員（地歴専修免許）、マスコミ・出版、公務員、国会図書館専門調査官、2種国家公務員（司書専門職）、地方公共団体文化財保護関係などが想定できる。

【履修科目】

語学、第一外国語である中国語は研究ツールとして必須であり、力をつけることを奨励する。特に近代史分野を専攻するものは副専攻中国語コミュニケーションコースなどを履修し高い水準の語学力獲得につとめる。英語については、どの分野を研究する場合も英語文献の参照が求められており、2005年を目処に英語研究文献の講読科目を設けることを検討し、その履修をすすめたい。

専門科目、専門科目を意欲的かつ集中的に履修することが望ましく、希望する学生の学部・大学院合同開講科目の履修を認めていく。2004年度より講読演習の中の1つをAdvanced Programに指定し、各時代、中心的な史料である官撰史料のより高度な読解技術の修得をめざす。また講読演習は大まかに古代・中世、近世近代、塞外と分かれているが、卒論で扱う分野以外の史料講読も意欲的に履修することが望ましい。新設の特講「東洋学のための情報処理学」は新しい研究ツールとしてのPCを使いこなすためにも履修が不可欠である。

5 東洋史学専攻モデル

(必 : 必修科目、登必 : 登録必修科目、教養 : 教養科目、人文 : 人文科学総合講座、哲・心・その他 : 各専攻科目)

科目区分	モデル1 近代史		モデル2 前近代史	
	東洋史学専攻科目	その他科目	東洋史学専攻科目	その他科目
1 回生	東洋史研究入門(登必) 漢文史籍読解(登必) 東洋史概説 ・ 史学概論 (登必)	東アジアと朝鮮半島(教養) 現代社会と法(教養) 経済と社会(教養) 社会学入門(教養) 中国史概論(人文) 文化人類学 ・ (学際) グローバルヒストリー ・ (学際)	東洋史研究入門(登必) 漢文史籍読解(登必) 東洋史概説 ・ 史学概論 (登必)	東アジアと朝鮮半島(教養) 歴史観の形成(教養) 新しい日本史像(教養) イスラーム世界の多様性(教養) 中国史概論(人文) 文化人類学 ・ (学際) グローバルヒストリー ・ (学際)
2 回生	東洋史基礎講読(登必) 東洋史講読演習 (必) 東洋史概説 ・ 東洋史学史	社会史 ・ (人文) 東洋思想 ・ (人文) 中国哲学史 ・ (中文) 近現代の諸相(学際) エスニシティとナション ・ (学際)	東洋史基礎講読(登必) 東洋史講読演習 (必) 東洋史概説 ・ 東洋史学史	社会史 ・ (人文) 東洋思想 ・ (人文) 民俗学 ・ (人文) 【考古学 ・ (人文)】 中国哲学史 ・ (中文)
3 回生	東洋史講読演習 (必) 東洋史講読演習 (登必)と ゼミナール(登必)のうち、1つか両方。 東洋史概説 東洋史特殊講義 ~	外国語文化講読(中Ⅱ 人文) 人文科学のための情報処理応用 ・ (人文) 他者認識の歴史(学際) 歴史人類学の諸問題(学際) 地域と移動(学際) 歴史認識・叙述の諸問題(学際)	東洋史講読演習 (必) 東洋史講読演習 (登必)と ゼミナール(登必)のうち、1つか両方。 東洋史概説 東洋史特殊講義 ~	外国語文化講読(中Ⅱ 人文) 人文科学のための情報処理応用 ・ (人文) 他者認識の歴史(学際) 歴史人類学の諸問題(学際) 地域と移動(学際) 民族誌の諸問題(学際)
4 回生	東洋史演習・卒業論文(必)		東洋史演習・卒業論文(必)	

上表はあくまで履修モデルです。この通り履修する必要はありませんし、この通り履修しても全ての必要単位を取得できるわけではありません。また、モデル表にある科目の履修セメスターも必ずしも配当セメスター通りとは限りませんので注意してください。皆さんの関心に応じ、他の科目も自由に履修してください。【 】の科目は開講されていません。



学修を進めるにあたって

1 文献資料室と共同研究室

文学部には、教員・学生・院生の研究・学修の場として共同研究室と人文系文献資料室が設けられています。文学部教学の大きな目標である専門的知識・技能の養成や、自主的・集団的な学修・研究の充実のために、この二つの場が大きな役割を果たしています。

人文系文献資料室

修学館地階にある文献資料室には、主に文学部の学問・研究に関する専門図書、学会や大学が発行する学術雑誌、各種の資料（歴史学関係の史料を含む）、辞典、図録などが集中的に保管されています。それぞれの専攻・コースやインスティテュートに関する専門図書や資料などは、それぞれの専攻が重点をおいてきた専門分野や収書の方針によって特色をもつものとなっていますが、その中でも特に線装本など貴重な図書や、『立命館文学』との交換で寄贈された学術雑誌など、二度と収書することが至難なものについては、別置されています。しかし大部分の図書は開架閲覧方式がとられていて、書庫に入って図書を検索し、閲覧することができます。文献資料室の書庫は下記のとおり、各専攻関係の図書は次のように配置されています。

書庫A 日本文学・日本史・中国文学・東洋史・製本和雑誌（大学・一般）

書庫B キング・サイズなどの大型資料類

書庫C 漢籍・埋蔵文化財・未製本カレント・明大本・和装本など 書庫Cの図書は閉架請求制です。

書庫D 哲学・心理学・英米文学

書庫E 西洋史・地理学・文化人類学・インスティテュート・地方史・中国雑誌・洋雑誌

研究内容が部分的に重なり、隣接分野となっている専攻間の図書・資料を相互に利用しやすいよう同一書庫に配置しています。それによって広い基礎をもち水準の高い学修研究の発展と、新しい研究課題の発見をが期待できるでしょう。

人文系文献資料室の図書は、全体として専門性の高いものが多く、したがって低回生にとって直接利用できる図書は少なく、広い教養を身につけるための啓蒙書、文学作品、一般の雑誌などについては、中央図書館の利用が望まれます。しかし上回生のレポート作成や卒業論文、修士論文の作成にあたっては、人文系文献資料室に収められた図書の利用が必要となる場合があります。所定の申し込みをすれば、開架閲覧を許していない貴重図書・学術雑誌の閲覧も可能です。

専攻・インスティテュート共同研究室

専攻院生・学生が教員とともに、専攻の学問研究について自主的な共同研究をおこなう場として10専攻およびインスティテュートそれぞれに共同研究室が設けられています。それぞれ違いがありますが、専攻・インスティテュートの教学にとって基本的な辞典などの図書、また演習・講読などのテーマと直接かわりのある専門図書などが置かれています。実験実習的な研究教育が重視されている心理学・地理学・日本史学専攻の考古学コースでは、機器・用具類も充実しており、専用の実験・実習室施設もあります。

これら共同研究室は、大学の休業日（土曜日・日曜日・祝日・夏期の一斉休業日、年末年始など）および授業や卒業論文・修士論文の試問審査など、文学部の教務・事務にかかわって使用制限する場合を除いて、原則として毎日午前9時から午後9時30分まで利用できます。ただし、実際の時間は、専攻によって異なりますので、各専攻の規定に従ってください。共同研究室の運営や利用の仕方および、日常的な運営については、教員・学生・院生の三者で協議することにしており、相互に円滑で節度のある使用を心がけねばなりません。

2 クラスロッカーの使用法について

（1）クラスロッカーについて

クラスロッカーは、研究入門、基礎講読、講読演習、演習などのクラス単位で必要なものを、一時的に保管しておくものです。例えば、研究入門の講義時に欠席者用レジュメなどを保管したりするために利用するものです。したがって、個人用の荷物を保管するようなことは禁止をしています。また、基本的に、カギをしめないで使用していただきますので、紛失しては困るものなどは収納しないようにしてください。

（２）使用の手順

１．文学部事務室へ、クラス単位であらかじめ利用の申請し、使用するロッカーの場所を決めます。

申請は随時受け付けますので、必要がある場合は、文学部事務室で手続きして下さい。

オリエンテーション期間の「オリター懇談会」で選出する「クラス代表者」が、クラスを代表して手続きをするようにしてください。

２．使用できる期間内は、必ず指定のロッカーを使用し、クラス単位で管理してください。

３．使用期限が来れば、クラス単位で荷物の撤収を行ってください。

（３）注意事項

利用上以下の点に注意して下さい。

クラスロッカーは、事前の申請に基づいてクラス番号を付番し、クラス指定しますので、確認して下さい。

クラスロッカーは１クラス１ロッカーではありません。

ロッカーは整理整頓に心がけて下さい。複数クラスで利用をお願いした場合、必ず物品のクラス間違いがないようにして下さい。

物置ではありませんから、ロッカーに保管するのにふさわしくないものは入れないで下さい。また、施錠しませんので、貴重品など紛失しては困るものは入れないで下さい。

万一紛失・盗難にあった場合、大学は責任を負いませんので注意してください。

サークルなどの団体が無断で使用した場合は、速やかに撤去します。

クラスロッカーの利用期限は、翌年３月15日（休日の場合はその前日）までです。ロッカーにはいつている物はすべて各クラスの責任で移動して下さい。翌年３月16日以降は、文学部事務室の責任で物品の廃棄をおこないます。

③ セミナーハウスの正課利用の手引き

（１）セミナーハウスについて

立命館大学では、正課・課外活動などで活用して、多様な学生生活を通じて得られる「学びと成長」を支援する施設として、セミナーハウスがあります。ここでは簡単に紹介します。ぜひ各クラスで積極的に利用してください。

なお、今年の４月から６月にかけて、新入生のクラスとして合宿をする場合は、別途の手続きになりますので、（５）の説明を参照してください。

１．衣笠セミナーハウス（立命館大学より徒歩５分）

衣笠キャンパスに隣接したアカデメイア立命21の中にあり、洋室の会議室と宿泊室および和室の会議室兼宿泊室を擁し、宿泊できる人数は最大で150名の収容力を持つ施設です。

国際平和ミュージアムも併設していますので、見学を兼ねてご利用ください。（併設施設は学生証提示で無料）

２．エポック立命21（びわこ・くさつキャンパス内）

BKCにもセミナーハウスがあります。

（２）施設の利用料金

正課で利用する場合は、宿泊料は無料となります。なお、正課以外でも担当教員の承認印を得ればクラス単位で利用する時は小集団クラス援助金で利用できます。

（３）施設の予約方法

利用にあたってはまず利用したいセミナーハウスに電話にて予約をしてください。利用日の３カ月前から１週間前（なるべく２週間前）までに、直接電話で利用期間・人数等を申請し、予約をしてください。（退館時に次回予約日の予約もできます）予約後の手続き等は、衣笠学生センター（研心館２階）に必要な書類がありますので、ご確認ください。

衣笠セミナーハウス：０７５－４６５－８１１０ エポック立命21：０７７－５６１－２７００

(4) その他

正課以外で利用する場合は、宿泊料が必要です。詳しくは衣笠学生センターにてご相談ください。

(5) 新入生クラス合宿の手続きについて

4月から6月にかけては、クラス、ゼミが集中的に利用する可能性があるため、あらかじめ、学部枠が設けられています。新入生クラスが、クラス合宿を行いたい場合は、この「学部枠」内で優先的に予約することになります。この期間にクラス合宿を行いたいクラスの代表者は、文学部事務室学生係にご相談ください。

4 学生印刷室の利用について

(1) 利用方法の説明

各小集団クラスでは、正課授業時に利用するレジュメ印刷の際に、学生印刷室に設置されている輪転機を利用することができます。輪転機は原稿1枚につき、10部以上の印刷をするときに利用できます。なお、原稿を作成する際にはB4もしくはA4にしてください。

文学部事務室前にある「小集団クラス印刷申請書」に必要事項を記載し文学部事務室窓口申請して下さい。
(事前に小集団クラス担当者許可印が必要です。)

記入された「小集団クラス印刷申請書」と「学生証」を窓口提出して下さい。窓口設置されている受付台帳に記載した後、学生証と引き換えに「印刷機の鍵」をお渡しします。

輪転機は、清心館1階 学生談話室東北角の学生印刷室内にあります。

印刷用紙は、文学部事務室内東側にあります。申請した枚数をもって、印刷をして下さい。(印刷に失敗する場合があるので、若干余分に持って行ってください。学生印刷室内には、コピー機用の用紙が用意されていますが、これはコピー専用ですので、輪転機での印刷には、絶対に利用しないで下さい。)

輪転機の利用方法は、学生印刷室内の掲示を確認してください。

輪転機の使用が終了したら、速やかに「鍵」を事務室窓口まで返却して下さい。引き換えに学生証を返却します。(未使用の印刷用紙は、事務室内東側の位置に戻してください。)

(2) 「学生印刷室」の利用時間帯

1. 印刷は以下の時間帯で使用するようにして下さい。終了時間には必ず印刷が終了するようにして下さい。

授業日の 9:00~21:30

窓口時間等は変更する場合がありますので、掲示等注意して下さい。

(3) 利用にあたっての諸注意

鍵は他人に貸し出さないで下さい。また、他人の学生証でカギを貸すことはできません。

「学生印刷室」は印刷物を散らかさないよう、整理整頓に心がけてください。

輪転機が故障したら、機械を無理に操作せずに、事務室まで連絡してください。

不正使用は絶対に行わないで下さい。もし不正利用が判明した場合、所属クラスの輪転機利用禁止、利用代請求などを行います。

学生印刷室内には、コピー機用の用紙が用意されていますが、これはコピー専用ですので、輪転機での印刷には、絶対に利用しないで下さい。不正に利用したことが発見された場合は、賠償していただきます。

5 自主ゼミ援助制度について

(1) 自主ゼミ制度について

授業で学んだことをさらに発展させ、その研究成果をまとめていくため、学部内のメンバーで組織された学習グループ（自主ゼミ）に対して、施設貸与や資料作成の費用を援助する制度です。

(2) 参加資格

文学部生・文学研究科生の登録が可能です。他学部・聴講生・科目等履修生・卒業生は登録できません。

(3) 援助内容

1. 経済援助 生協で利用できるコピーカード 1,000円分
2. 施設貸与援助 学習会・研究会のための施設貸与および自治会輪転機使用（用紙は各自で準備）
3. 自主ゼミ用掲示板の使用 清心館 1Fにある自主ゼミ用掲示板を使用することができます。

(4) 受付期間・受付方法

登録の受付は、年2回、4月と10月に文学部事務室または文学部自治会（清心館 1F）にて行います。
登録手続きの詳細については、別途掲示にてお知らせします。（4月上旬および9月中旬に掲示予定です）

(5) その他

自主ゼミ活動についてはセメスター単位で登録を受け付けます。また、活動終了時に、活動実績・成果を報告してもらいます。

6 「小集団教育推進補助費」の取り扱いについて

(1) 「小集団教育推進補助費」の目的とその適用の範囲について

各小集団クラスにおける学生の自発的・集団的学習、研究活動を行うために必要な以下の目的について補助を行います。「小集団教育補助費」では下記の例のような使用が可能です。その執行については、各小集団において会計担当者を決めて文学部事務室に届け出て下さい。会計担当者には「クラス資料費伝票」を交付しますので、会計担当者が責任をもって管理・執行するようにしてください。

生協発行のコピーカード（1回の購入限度額5,000円、1クラス15,000円まで）

クラス共通のフロッピーディスク（1クラス2,500円まで）

クラス教材用VTRテープ（1クラス2,500円まで）

その他会計担当者に配布する「小集団教育推進補助費利用の手引」等を参照してください。

(2) 補助額

1クラスにつき年額15,000円です。

(3) 適用期間

毎年4月伝票交付日～翌年2月末まで利用できます。

(4) 使用の流れについて

各クラスで、クラス代表者とともに、「クラス会計」担当者2名を選出してください。

（1回生は、オリエンテーション期間の「オリター懇談会」において選出してください。）

クラス責任者は、事務室が主催する説明会に参加してください。

（説明は、文学部自治会が招集するクラス代表者会議（仮称）を通じて行います。連絡があった場合には、必ず参加するようにしてください。なお、その際には、印鑑を持参の上参加してください。）

「伝票」を交付します。

本学生協（中川会館地下1階）にて物品等の購入ができます。使用方法は、会計担当者に配布する「小集団教育推進補助費利用の手引」および「伝票」の裏書を参照してください。1クラス年間15,000円まで使用できます。使用期間は「伝票」交付日から翌年2月末までになります。伝票をなくした場合は、事務室に申し出てください。

「伝票」を返還します。

使用期限（翌年2月末日）を満了した場合は3月15日（休日の場合はその前日）までに、全額（15,000円）を使用した場合は、直ちに「伝票」を事務室に返還してください。

7 清心館「学生談話室」の利用について

清心館の一階に「学生談話室」があります。これは、学生の交流・休憩、クラス活動、自習等を行うための施設であり、文学部が「学生談話室利用申し合わせ」に基づいて文学部自治会と共同管理しつつ、日常的な運営を学生の自治に委ねています。利用者が相互に譲り合って、気持ちよく利用できるように努めてください。

1. 「学生談話室」は全面禁煙です。
2. 紙コップや空き缶などゴミは必ずゴミ箱へ捨てるようにしてください。
3. 椅子や机などを勝手に動かしたり、汚損したりしないようにしてください。
4. 「学生談話室」を利用して行事や情宣活動を行うことは許可制です。利用を希望する団体は、文学部自治会に相談の上、文学部事務室の許可を得てください。なお、許可された場合も「学生談話室利用申し合わせ」を遵守して利用するようにしてください。

8 立命館大学人文学会

立命館大学人文学会は、立命館大学文学部における学問研究の発展・深化と普及を目的として、文学部の教員・院生・学生によって構成された学会です。

当学会の活動は、1934（昭和9）年『立命館文學』の創刊に始まっています。この『立命館文學』は、斯界の評価も高く、月刊にて定期的に発刊されていましたが、戦争の拡大するなか、1940（昭和15）年10月には、ついに第60号の刊行をもって一時中断のやむなきにいたりました。しかし戦後間もない混乱期の1947（昭和22）年7月には、早くも『立命館文學』第61号の刊行を再開し、今日にいたっています。

1952（昭和27）年1月に、学会は立命館大学「人文学会」として正式に発足。会則を制定しました。1969（昭和44）年には、新たに学生部会が発足し、更に充実した学会に発展しました。

『立命館文學』の発行は、2005（平成17）年3月現在で、第589号に及んでいます。

人文学会の主要な活動は、『立命館文學』の刊行と教員・学生の研究・学修の助成におかれています。『立命館文學』に掲載された研究論文は、専任教員の論文をはじめ、学部学生の卒業論文のタイトルや院生の修士論文の概要、及び院生のおこなった書評や学界動向の紹介、さらには卒業生や非常勤講師の研究論文も数多く掲載されています。発表された研究論文の内容は、わが国の各分野の学界において高い評価をうけているものが多く、『立命館文學』の学会誌としての水準の高さを示しています。

『立命館文學』に掲載されている研究論文や、修士論文・卒業論文・博士論文（概要紹介）・書評・学会動向などは、教員の講義・演習に生かされ、また学生のグループ研究・個人研究の参考に供されていますが、今後ますますひろく活用されることを期待しています。

「人文学会」はまた院生・学生の自主的研究の助成をも目的としており、そのための事業として、学生部会による研究誌の発行、あるいは公開講演会の開催なども行なっています。学生諸君は人文学会委員を選出し、それを通じて学会運営に参加することとなっています。みなさんが学会活動に深い関心を持ち、積極的に参加されることをつよく望みます。

9 文学部事務室について

(1) 文学部事務室とは

文学部事務室は、文学部の学生のみなさんが必要な手続きをおこなったり、必要な提出物を提出する等、事務手続を行う窓口であるほか、試験や授業に関する連絡を行ったり、履修・進路・留学などの相談に応じる窓口でもあります。なお、電話での対応は、基本的に行っておりませんので、直接の来室、または、メールによる相談をお願いします。

学生印刷室にある輪転機を使用したいとき（学生証が必要です）

各専攻・プログラムの共同研究室を利用したいとき（学生証が必要です）

学割・証明書の発行（可能な限り、証明書自動発行機で購入してください。）

休学・復学・退学や追試験、受講登録、教育実習登録など、各種の手続き書類の配布・受付

その他

文学部事務室を通じて、立命館大学が提供するさまざまなプログラムやサービス、施設などを活用し、積極的・主体的な学修・学生生活をおくってください。

(2) 窓口時間

授業のない期間については、時期によって窓口時間が違いますので、よく確認してください。

【開講期間中の窓口時間】9：00～11：30 および 12：30～18：30

2005年度より窓口時間帯が18：30までとなります。ただし、夜を中心に学修する学生、社会人学生で上記時間内に来室する事が難しい場合は、18：30～21：30に来室してください。

なお、17：00以降は学芸員課程についての対応はできませんので注意してください。

(3) 文学部事務室ホームページ

【立命館大学文学部事務室ホームページ】 URL <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jimu/>

文学部事務室では、主な情報をホームページで提供していますので、ご覧になってください。

（提供情報の一例）定期試験時間割、休講情報、教職課程・学芸員課程・学部独自インターンシップなどの諸連絡、その他

また、文学部事務室では、メーリングリストによる各種案内や休講情報も、随時行っています。1回生オリエンテーションでの「書類交付ガイダンス」でみなさんに配布する「RAINBOW ID通知書」のIDを活用して、情報入手してください。